
インフィニットストラトス 白の消失、黒の出現

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニットストラトス 白の消失、黒の出現

【NNコード】

25542X

【作者名】

ケン

【あらすじ】

最近、自分の成長に焦りを感じ始めてきている一夏。気分を変えようと散歩に出かけた。

そこで一人の女性と出会い

女性の言葉で一夏は彼女たちに抱いている

感情に気付き、復讐を誓つ。

プロローグ

そこでは一人の少年と3人の女性が立っていた。

「なぜだ！なぜ、お前がそこにいる！？」

一人の女性が叫んだ。

「彼はこっち側の人間になつたのよ。貴方達に復讐するためにな？」

「ああ、そうだ」

「何かの間違いだよね？」

「そうだ、何か弱みでも握られてるのか？」

少年に恋していた彼女たちは悲痛な叫びをあげる。

「違う、俺は自らの意思でこいつらに入つた」

「な、何で？！」

「何でだつて？ふざけんな！」

「「「「！」！」！」

「今まで散々、俺を振り回して口ケにした癖に今さら、俺が寝返る」と、

帰つて来いだとか何だとか言うが、

もうてめえらにふりまわされんのは、こりごりなんだよ！」

「私達は別に貴方をふりまわしてなんか・・・」

「しらを切るつもりか？」

「「「？」？」」

「てめえらはこいつに今まで何をしてきた？」

「こいつの事情も考えずに特訓を提案したり、こいつが嫌がつてんのに、

無理やり付き合わしたり、こいつが女の子と喋つただけで、
勝手に不機嫌になつてこいつにあたつたりエスでボコボコにしたり
とかは

ふりまわしてゐ内には入らねえのか？」

「…………」

少女達は今までの事を指摘され何も言い返せなかつた。

「それに貴方もよ、織斑千冬」

「何?」

「貴方は彼に期待していたみたいだけど、その期待の仕方が、尋常じやなかつた。いや、期待しすぎたと言つべきかしらね」「…………」

「図星だろ。だから俺はお前たちに敵対する。この力でな!」
彼が纏つていてる黒いISから黒い炎のような物が噴き出し始めた。

「あ、あれは」

「これが俺の憎しみの姿だ!」

辺りが黒い炎のような物で包まれた。

プロローグ（後書き）

こんにちは、ケンです。まだ別の連載作が終わってない中での、連載です。更新は遅くなります。では、よろしくお願いします。

第一話　日常

「いぐぞ！一夏！」

「ああ、来い！」

少年と少女がアリーナでIS同士による模擬戦を行っていた。IS、それはとあるマッドな天才発明家により世に出された、最強の兵器。

IS学園、そこはIS操縦者を育成する世界唯一の学園である。ISと言つものは本来、女性にしか扱えないパワードースーツそれにより、世界は男尊女卑から、女尊男卑に近いものへと変わった。

世界共通の常識は「ISは女にしか使えない」しかし、その世界の常識を根底からぶち破つた少年がいる。その名は織斑一夏。

あの世界最強と謳われている初代ブリュンヒルデ、織斑千冬の実の弟である。

「おおおおお」

一夏が雪羅のカノンモードを撃つた。

「甘いぞ！一夏！そんな物、そつやすやすと当たらんぞ！」

「分かつてるよ！行くぜ竇！」

一夏と鬪っている少女は篠ノ之竇。

先程紹介した、天才マッド発明家の篠ノ之竇の妹である。

これは少年、織斑一夏の物語である。

「また、負けた」

「ふん、鍛錬が足らんぞ！一夏！男が女に負けてどうするー！」

先程の勝負は籌が勝つたようだ。

「へえへえ。そうです、」
「ざいますね」

「で、では、さつさつ言つていた事だが・・・」

「ああ、買い物だつて？良いぜ、付き合つよ」

「そ、そつか！そつか、うん、うん」

少女は嬉しそうに顔を緩めた。

この少女、実は一夏に恋をしているのだ。

「じゃあ、もう今日は帰ろうぜ」

「つむー！そだな」

食堂へ

「あら、一夏さん」

「ああ、セシリ亞か」

「あたしもいるわよー！」

「ああ、鈴も」

今、一夏に話しかけてきたのは、

セシリ亞・オルコット、鳳鈴音である。

二人は代表候補生でもある。

「先程まで、訓練をしていたんですね？」一夏さん

「ああ、まあな。負けたけど」

「あんた、また負けたの？最近、勝ち星挙げてなくない？」

「うるせえ」

だが、実際そうだった。

最近は専用機を持ち始めて間もない籌に負けている。

逆に籌は代表候補生にも徐々に勝ち始めてきていた。

今、専用機持ちのランクを作るとしたら、

一夏が見事に最下位である。

「ですが、一夏さんも実力をつけてこますわよ？」

「お世辞はいこよ、セシリ亞」

「お世辞なんかではありますまい！徐々に一夏さんも強くなっていますわよ」「だつたらいいんだけどな」

一夏の部屋

一夏はベッドで横になっていた。

「でも、実際鈴の言うとおり何だよな～最近は算に負け続けてるし、授業でも叱られることが多くなつたし、それにクラスの子と模擬戦したけど、

結構危なかつた場面もあつたからな～」

この前の放課後のことである。

いつもの如く樋無の特訓を受けに行つたら、突然、樋無がこういつたのである。

「一夏君、一度クラスの子と模擬戦してみよつか？」

「へ？ 模擬戦ですか？」

「そう、模擬戦」

という事でクラスの子を呼んで模擬戦をしてみると、かなり危ない場面もちらほら見られたが何とか勝てた。

「はあ、はあ」

「ちょっと、一夏君。さつきのは危ない所が何個か見られたわよ？」

「はい

「最近、いろんな事があつたから特訓していないけど自主連してる

？」

「・・・・・・

「その様子だとしていいみたいね」

実際、一夏は最近、放課後に自主連をせず、その日の勉強で手一杯だつたりする。

「勉強も大事だけど実技も出来ないとダメよ？」

「はい」

「樋無さんはああいうナビ、あれを俺にやらせるのがおかしいだろ。

そもそも、俺は事前勉強を一切してないんだから。その人と一緒にして欲しくねえよ」

一夏は最近の自分に焦りを感じていた。

実力が伸びない事などで精神的に疲労もたまつてきているのである
「まあ、言い訳にしかすぎねえか。寝よ。明日も早いんだし」

そう言い、一夏は眠りについた。

第一話　日常（後書き）

どうも、一度目の更新です。
如何でしたか？
感想も待っています。
では、さよなら

第一話 いらつわ

今、一夏はとある少女を校門で待っていた。

この前の模擬戦で負けた為に買い物に付き合つてこつ約束をしたからである。

「遅いなあゝ 篠の奴」

「ま、待たせたな」

「ああ、来たか。行こうぜ？」

「う、うむ」

篠が来た事により一人は買い物へと向かつた。
その二人を追う影に気付かず。

「見た？」

「ええ、見ましたわ」

「追跡あるのみだね」

「そ・うだね」

「あれ？珍しく簪もいるじゃないの」

「うん、さつき一夏が見えたから」

「じゃあ、行きますか」

「「「「了解」」」

いつもの専用機メンバーだった。

「遅いぞ、一夏！」

「無茶、言つなよ。こつちは寝不足なんだぜ？」

「何故だ？」

「昨日、テストの勉強してたんだよ。今度あるだろ？」

「そんな物は毎日、予習復習していればいけるだろう

「そんなものつてお前なあ、毎日一日動かしてんのにそんな時間あるのかよ?」

「ああ、時間配分さえ考えれば出来るだ?」

「よくできるなそんな事」

「これぐらいは誰だつて出来るだ? 一夏だつてしてこるであらわへ。」

「・・・お前らと一緒にすんなよ」

「ん? 何かいつたか?」

「いや別に。行こうぜ?」

「うむ!」

「むへ、何一人で良い雰囲気になつてんのよ」

「抜け駆けは無しつて筈が言つてたのに」

「これは後で一夏を鍛える直す必要があるよつだな」

「ふふ、一夏さん楽しみにしてるといいですわ」

「この瞬間、一夏が筋肉痛で苦しむことが決定したよつだ。」

「ふ~最近はもう、服も秋物が多くなつてきただな」

「ああ、そうだな」

「人は服屋から出てきたところであつた。」

「一夏、すまないが少し待つていてくれるか?トイレに行つてくる

「へいへい、どうか」

「すまないな」

筈は一夏に荷物を預けトイレへと走つていった。

「は~本当に俺は強くなつてんのか?」

一夏は最近の自分について考えた。

△最近は筈にも負けるし、代表候補生のみんなにはまだ一回も勝て

てないし、

楯無さんは怒られるわ、千冬さんは怒られるわ。
本当に皆を守れる力なんて俺が手に入れられるのか？』

「隣良いかしら？」

「え？ はい、どうぞ」

隣に女性が座つた。

「久しぶりね。織斑君？」

「えつと、失礼ですけどどうかでありますつけ？」

「あら、もう忘れたの？ ほら、前にテレシアで会わなかつたかしら
？」

「ああ！ あの時の服の人！」

「ふふふ、そうよ」

「確かスコールさんでしたつけ？」

「正解。よく覚えてたわね」

「ええ、まあ」

「所でさつき何だか表情が優れなかつたけど何か悩みでもあるの？」

「え？ 顔に出てましたか？」

「あら、やつぱり悩みがあつたのね？」

「あ」

「ふふふ、面白い子ね」

「はははは……」

「一夏……」

「ん？ 彼女さんかしら？」

「か、彼女！」

篠は思わず顔を赤くしてしまつた。

「違いますよ」 ただの友達ですよ

「む！」

「痛え！ 何すんだよ、篠！」

「ふん、自分の胸に手を当てて考えてみる！」

「あらあら、不機嫌さんね。また会えたら今度はお茶でもしましょ

う？

「あ、はい」

そのまま、スコールは人ごみの中に消えていった。

「一夏、今の人は誰なんだ？」

「知り合いだよ」

「お前の周りには美人さんがよく集まるんだな」

「は？ 何の事だよ？」

「ふん！ それよりも行くぞ、一夏」

「今日は付き合つてくれてありがとう」

「ああ、いいよ。それよりも早く帰ろうぜ？ 眠い」

「そればっかりだな、貴様は」

「お前が朝早くに起こしたせいだろ？ が！ しかも理由も聞かせずにいきなり、

足踏みやがつて何さまだ」

いらっしゃながらも帰つていった。

第一話 こりつあ（後書き）

こんばんわ～ケンです。

如何でしたか？

書き忘れてましたがこの話は原作7巻後の話です。

一夏は原作あんなにもふりまわされてんのにいろいろとか、しないのか？という事で考えてみました。

感想も待っています。

では、さよなら

第三話 かすかな異変（前書き）

いつも、ケンです。

この作品での簪と他のメンバーとの友好関係は、
名前で呼び合つくらい仲が良いです。
では、お楽しみください。

第二話 かすかな異変

現時刻、6：30

一夏の部屋

今、一夏は昨日の疲れからかいつもなら起きる時間を寝ていた。
昨日も、帰つてからEISの理論について分からないとじりを調べて
たら、

夜も遅い時間帯に終わった。

本来なら眠い体に鞭をうち、起きなければならぬのだが
幸い今日は日曜日、ゆっくり眠れるというわけである。

来客さえ来なければ・・・

「一夏！朝稽古だぞ！」

静かな部屋にドアを強く開けた音と凜々しい声が響いた。

「ん？まだ寝ているのか？おい、起きろ一夏！」

こつして一夏の一日は幼馴染との朝稽古から始まる。

「ハハハハハハハ」

「起きないな、起きろ一夏！朝稽古の時間だぞ！」

「ん~うるさいな~日曜くら~いゆつくり寝かせりよ~」

そう言ひはぎとられた布団を再びかぶり眠りに着いひつとするが、
幼馴染がそれをさせなかつた。

「起きろ、一夏！不摂生はいかんぞ！」

毎日の継続が、血となり骨となるのだ！

「お前は何時代の人間だよ」

「良いから、起きろ！」

「あーもう分かつたよ！起きればいいんだろ一起きれば！」

「あ、ああ」

「で？今日も剣道場か？」

「いや、今日は皆もやるという事で朝から模擬戦をする事になつて

るんだ」「

「こんな早くからアリーナの予約取れたか？」

アリーナを使用するには予約を取らなければいけないのである。

「いや、使用時間は10時からだ

「はあ？ まだ時間あるのに俺を起こしたのか？

「いや、折角だから剣道でもどうかと

「良いよ、俺はバス。まだ寝むい

「いや、一夏、もう時間何だが？

「それが？ 眠いから寝て何が悪い？ 今日は休日だぜ？

「いや、いやすまない

「じゃ、御休み」

一夏は再び眠りについた。

「気のせいだろうか？ 最近一夏がだらしなくなつていつのいつな気がする」

疑問を持ちつつも篝は剣道場へと向かった。

三時間後、第3アリーナ

「遅いね一夏」

「一体嫁は何をしているんだ？」

「さあ、寝てるんじゃないの？」

「一夏に限つてそれは無いとは思つ

上から、シャル・ラウラ・簪である。

「あ、来ましたわ！」

セシリ亞に指をさす方向を見ると一夏が眠たそうな顔で、

こちらに来ているのが見えた。

「遅いぞ！ 一夏、何をしていた！

「寝てた」

「は？ もう9時よ？ まだ寝てたの？」

「まあな

「昨日、何時ぐらいに寝たの？」

「確かに……3時はまわってたような気がする

「3時つて夜中の三時だよね？」

「ああ

「そんな不摂生をしていては体が持ちませんわよ。」

「そうだな

「それに今の一夏の髪の毛す」

一夏の髪の毛はいつもはきれいに寝癖も整えられているが、今はかなり、曲がったりはねてたりした。

「そうだな。昨日はシャワー浴びてそのまんまで寝たからなでも、髪ぐらには整えようよ。人は外見で判断するよ。」

「……俺の勝手だらうが」

「何か言つた？一夏」

「いや、何も」

「そう、じゃあ始めようか？」

「だな」

「ですわね

「うん」

「そうね」

「分かった

「いいちいち指図してんじゃねえよ。お前らは俺の何なんだよ。俺の勝手だらうが

それに時間をよく見ろー。まだ9：30だぞ。それで遅いって、お前達が早くに来て待つていただけだらうが」

一夏は心の中でいらっしゃながらも模擬戦のため、準備運動を始めた。

第三話 かすかな異変（後書き）

如何でしたか？

テスト一日目が終わりました。

残り6教科ぐらいあつたと思います。

改変物語の細かな修正も着々と進んでおります。

話が矛盾したりつながらない場合はそこまで

修正が完了しているという事ですのでご承知ください。

では、またお会いしましょう。

第四話　VS鈴

「誰から行く？」

「ここはぐじで決めないか？」

「でも、前の抜け駆けが・・・」

「それもそうだが、まだ一夏はそこまで実力がある訳ではない。

怪我でもされたら困る

「まあ、それもそうね」

「ですわね」

本人達は聞こえていないと思つてゐるだらうが一夏には聞こえていた。

「そうだよな。まだ俺はあいつらに勝てるほど強くない。
分かつてたつもりだけど直接あいつらから聞くと辛いな」

「行くわよ～じゃんけん！ポン！」

「やつた～あたしが一番よ～」

「うう、あの時チヨキされ出していなければ」

「3番目・・・」

「私は4番目か」

「僕は2番目」

「私が5番目か」

順番はこうである。

1、鈴

2、シャル

3、簪

4、篇

5、ラウラ

6、セシリ亞

「じゃあ、始めるわよー！一夏」

「待て、まだ準備が……」

「問答無用よ！」

そう言い鈴は早々と展開した。

「へいへい」

一夏も嫌々ながら展開した。

「始めるわよ」

「ああ

二人の戦いが始まった。

「先手必勝」

甲龍の鳥がスライドし籠包が放たれていた。

۲۰۰

一四一

一夏も雪片一型で応戦しようとするが砲身も砲弾も見えない。いつ、どのタイミングで来るのかが把握しづらいので、モロに喰らってしまった。

「.
」

「逃がすもんですか！」

一夏は鈴から距離を取ろ

「はあああ！！」

二刀流の双天牙月で一夏を切つていつた。

「そんな事、試合で言えるわけないでしょ？」「…

卷之三

一夏は丸腰の状態で鎧廻を避けていが

またまた」「

わせるが！ カンゼンモード！

— そんな物喰らわなーいわよ! —

「な！」

一夏は至近距離で撃つたにもかかわらず避けられた事に驚いた。

「一夏の奴、まだ気づいていないのか？」「どうかしたのか？」

「ああ、さつき一夏は至近距離からの雪羅の砲撃を、避けられた事に驚いていただろ？」「ひろ？」

「ああ、それがどうかしたのか？」

「実は一夏はね癖があるんだよ」

「癖？」

「そう、一夏は雪羅のカノンを名前を叫んで使つてゐるでしょ？それで、撃つてくるつて分かるんだ」

「確かに。だがクローモードは何も言わずに使つていいんだ？」

「一夏の得意武器は近距離のものばかり

簪が静かに語り始めた。

「クローモードは近距離武器だから名前を言わずに使える。だけど、シールドモード、カノンモードの一いつ、

カノンはともかく、シールドは恐ひへ一夏の中では遠距離武器だと、無意識のうちに判断しちゃつてるの」

「やつ言つ事。HISの戦には一瞬の判断が勝敗を分ける時だつてある。

だから一夏みたいに名前をこつちやつとどんなものか、

予想は着くから一瞬で対策が打てる」

「だ、だが敢えて言つておいて別の武器を出す」とも可能なのではないのか？」

「確かにその様な事も可能ですね。ですがそれには最低でも一つの操作で、

複数の操作を、つまり並列思考が出来なければ無理ですね。人間は音で判断する事もありますから」

「セシリ亞の言つとおり今の一夏では並列思考は出来ない。

だから、バカ正直に言つた武装しか出せない。

それにはいっはただでさえエネルギー消費の多い武装しか、持つていないにも関わらずバカスカそれを使用する。

その為にエネルギーがすぐに尽きて負ける

「ぐつー！」

白式のエネルギーは既に尽きかけており雪羅はおろか、零落白夜、イグニッシュ・ショーン・アースト瞬時加速すら使えない。

「さあ、これでフィニッシュよー！」

鈴が双天牙月を二つに分解し、同時に投げた。一夏はそれを避けようとするが一方に意識が集中しそぎてしまい、もう一方の攻撃を喰らい残りも喰らってしまった。

「隙あり！」

「しまつー！」

そのまま、一夏は龍砲を喰らいエネルギーが尽きた。

「ふ～勝つた。あんたもまだまだねえ」

「・・・・」

「じゃあ、今日のご飯は奢つてね？」

「はあ？ 何言つてんだ？ そんなこと聞いてねえぞ！」

「え？ そうだつけ？ ごめんごめん。実はね負けた人は、勝つた人に奢らなきやいけないつていうルールなの」

「ふざけんな！ 聞いてない事を出来るか！」

「でも、負けたじやないの、あんた」

「ぐつー！」

「じゃあ、よろしくね。あんたが勝てば良いのよ」

鈴は嬉しそうにスキップしながら観客席へと戻つていった。

「ふざけてんじやねえぞー！ 何で賭けありの特訓に参加しなきゃいけないんだ！」

俺が負けるのは決定だらうが！わざとしてんのかよ！
一夏はいらっしゃながらもエネルギーを補給しに行つた。

まだ、誰も気づいていない少年の中の黒い感情。
それは少年すら気づいていない物。

それに気づいたとき少年は生まれ変わり、

少女達は後悔する。

『ああ、何で気付かなかつたんだらう』

第四話 ＶＳ鈴（後書き）

こんばんわ～

定期考査で忙しいケンでござります。

活動報告に書きましたが20日までは改変の方は、
更新致しません。別作品はこの期間に更新を、
改変の方は、細部の修正を行います。
よろしくお願ひします。

第五話 バンシャル、そして女子の話（前編）

おはようございます。

今日は学校も休業日で休みですので、
更新したいと思います。

注意：このページはエネルギー補給についての手早く終わらしられる
作業ととらえて下さい。

第五話 √Sシャル、そして女子の話

休憩も終わり次はシャルとの対戦だった。

「よろしくね一夏」

「ふああああ、よろしく」

「もう、みつともないよ？一夏」

「あ、ああ悪い」

「お前らがこんな朝早くから特訓何か誘うからだろが！
今日はせっかくの日曜なのに俺を過労死させる気か！」
いらっしゃながらも模擬戦が始まった。

「行くよ、一夏！」

シャルはマシンガンを両手にホールし、乱射し始めた。

「くそ！」

白式の雪羅はエネルギー兵器には敵なしだが、
生憎、実弾兵器には全く耐性が無いため防ぐ手立てがない。
それにより避けるしかないのだがいかんせん、

一夏はまだ、技術が未熟なため一発ならまだしも、

この様に何発も撃たれると全く避けられずに当たってしまうのである。

「まだまだよ」

「くそが！」

一夏は雪片式型をホールするがシャルは中距離武器をホールし、
それを防ぎまた距離を取りマシンガンを連射。
この繰り返し。

「くそ！一気に薙ぎ払う！カノン！」

「当たらないよ！」

しかし、シャルは一夏の癖を熟知しているため、
事前にパイルパンカーをホール、避けると同時に一夏に接近し
パイルパンカーを一発撃ちこむ。

「くそ！」

一夏も雪片を当てようとしたが、すぐさま離脱し当たらない、距離まで下がりスナイパーライフルを放った。

「くー！」

思わず下がろうとするがシャルはそれを許さず、再び近づき近距離からのスナイパーライフルを、弾切れを起こすまで、撃ち切った。

「聞合いは外せないよ？このまま、終わらせる」

「この距離なら外さねえ！カノン！」

雪羅のカノンがシャルを直撃した。

「よし！」

しかし、爆煙が晴れるとそこにはシャルはいなかつた。

「な、どこ行つた！」

「一夏？一瞬でも意識が外れるのは駄目だよ？」

「しまつー！」

そのまま、シャルのパイルパンカーを喰らひ白式のエネルギーは尽きた。

「ふーお疲れ様。一夏

「ああ

「じゃあ、今田のお屋よろしくね？」

シャルは嬉しそうに顔を緩めながら観客席へと戻つていった。

「今日は日曜だから出かけようと思ったのにーあいつらの所為で、全部の予定がおじやんじやねえかー」

そつ思いつつ一夏は休憩込みでエネルギーを補給しに行つた。

「あーあ、めんどくさい。何でいつも連戦でしなきゃなんねえんだよー」

「…………でさー」

-גַּעַמְלָנִים-

ん？誰か話してるので？日曜なのに残ってるって珍しいな

「でもまあ、織斑君でござくない？」

自分の名前が聞こえ足を止めた。

「あ！ それ分かる？」

「セーヴィー」ですね、この前の考査あつたでしょ？」

「うん、あつたけどいいかしたの？」

前の考查はあたし、家の事情で全く勉強出来なかつたつて言つた

「ああ、確かに」

「で、今日は最下位かなって思つたら私よりも下の人がいたのよ！」

「え、もしかして」

「そつなの！ 蔡斑君てさ放課後も残つて勉強してたでしょ？」

「それで、何も勉強していない人に負けたの？」

「 そうなの。それでねこの前聞いてみたの。どんな勉強方法してる

८०

「そしたら、自分で問題作ってそれを必死にしてたんだって！」

え、そんなのテストで出るはずないじゃん！」

細君の心事書とがしてるのは量一便で時間の無

「はははは！確かに不効率でさらに能率も悪い勉強方法とか初め

て聞いたよ！」

その娘がお嬢様たらがございなかつた

「何で？」の前聞いたときは良い勉強方法だね！って言つた

だつたのかよ

一夏はそのまま、床にしゃがみこんでしまった。
「くそ！何で俺がこんな田に遭わなきやいけないんだよー。」
そう思いつつもアリーナへと戻つていった。

徐々に積もる黒い感情。
これがこの先どうなるのかは、
これからのお楽しみ。

第五話 ヴーシャル、そして女子の話（後書き）

話の中で女子の話のシーンがありましたが、そこは整備室を出て、アリーナに行く途中のシーンとしてござりまして下さい。

それでまたねらい

第六話 ＶＳ簪 そして僅かな察知

一夏は重い表情でアリーナに戻ってきた。
しかし、その事に誰も気がついてはいなかつた。

一人を除いて・・・

「どうしたんだろう? 一夏、さつきよつも元気がないといつが・・・

簪だけがメンバーの中で唯一若干気が付いていた。

「もう、始めても良いかな? 一夏・・・」

「ああ、始めようか」

そう言い簪は打鉄式式を展開するが一夏はまだだつた。

「一夏?」

「いや、なんでもない。白式!」

いつもなら一夏の呼びかけに瞬時に反応する白式だが、
この展開では若干遅く感じた。

「気のせいいか? 今、白式の展開が遅かつたよつな?」
疑問を感じつつも模擬戦を始めた。

「どうだつた。シャルロット?」

「うん、やつぱりラウラの言つ通りだね
「何がですか?」

「ああ、一夏はね効率よく戦闘を運ぼつとしていいんだよ
「効率よく? どういう意味だ?」

「先程の戦いのパターンで言つと一夏は戦いの序盤は有利に運んで
いるが、

最後は決まつてエネルギー切れを起こし負けてしまつ

「つまり、一夏はエネルギーを考えずに最初からエネルギーを、

消費しそぎて、負けているといつのか?」

「ああ、まだあいつがそれに気づいているならばまだ修正の余地はある。

だが、あいつはその事に全く気が付いていない

「ならば教えれば……」

「だめよ」

「え?」

「そうしたらあいつは私たちからの情報でしか自分の間違いを見つけられなくなる」

「そう、自分で気付かない限りこれ以上強くはならない」

「そ、そろか」

「くそ、やつぱり簪とは完全に相性最悪だ」

一夏は弾丸の嵐に完全に囚われていた。

距離を取ろうにも簪は近距離も遠距離も扱うため、間合いは関係なかった。

「もうすぐ。もうすぐで山嵐の準備が終わる」

簪は得意の並列思考により闘いながら大気の状態、システムの状態を確認していた。

「もうエネルギーも雪羅、零落白夜も一発分しか残っていない。どっちを使うべきなんだ!」

一夏は弾丸を避けながら考えていたが、

すぐ後ろに壁が迫っている事に、気づいていなかった。

「もう少し、もう少しで一夏は壁に当たる」

彼女の読み通り一夏は壁に背中からぶつかり動きを止めた。

「しまつ!」

「終わる。山嵐!」

そのまま何発ものミサイルが放たれ、そのほとんどが一夏にあたり

爆発を起した。

「ぐう！」

「だ、大丈夫？ 一夏」

「ああ、まあな」

簪が心配げに覗いた。

「よく見ると簪って可愛いよな」

簪の顔を見ていて思わずほんのりと顔を赤くしてしまった。

「一夏？」

「いや何でもない」

「全く情けないぞ一夏！」

皆がこちらに来ていた。

「そうよー何で後ろに壁がある事ぐらい気付かなかつたのよ

「そうだぞ、一夏。男である貴様が女である私たちに負けてビリするー。」

「・・・・・うるせえな」

「なんか言つた？ 一夏」

「いや、何でもねえ」

そう言い一夏は次の模擬戦に備えるために整備室へといつた。

「ふーん、変な一夏。ねえ、簪

「・・・・・」

「簪？」

「いや、いや何でもない」

「そう」

「さつやー、一夏『うるせえ』って言つてたよつな・・・・・

いつもとは違う怒った感じで・・・・・

「くそがー何なんだ、あいつらはー、ひちは何もしていない状態で
ここまで、

来れたんだぞ！あいつらは何年経験を積んでると思つてんだ！』
一夏はいらっしゃながらも整備室に向かつた。

第六話　VS 簡 そして僅かな察知（後書き）

どうも～一回目の更新です。

実は最初の戦う順番で二番田と三番田を間違つて、覚えてしまい先程修正いたしました。

それよりも如何でしたか？

徐々に溜まつっていく黒い感情。

こう言うストレスは定期的に出さないといけませんね。では、さよなら～

第七話 ヴィラカラ そして怒る一夏

「遅いぞ！一夏、何をぐずぐずしているのだー。」

「ああ、悪い」

「トイレだから仕方ねえだろ？がー第一、男子便はここから遠いんだぞ！」

IS学園はほとんどが女子のため、トイレもほとんどが女子便。そのため数少ない男子便まで毎日、走っているのだ。

「まあ良い、では始めるとするか」

そう言いつつラウラは展開した。

「へいへい」

一夏も展開しようとするが・・・

「ん？」

「どうかしたのか？」

「い、いや何でもねえ」

「まだ、白式の展開速度がさつきよりも遅くなってる気がする」

「始めるぞー！」

「ああ」

模擬戦が始まった。

「ねえ、簪」

「何だ？簪」

「さつきの一夏の展開、遅くなかった？」

「そうか？いつも通りだと思うが

「そう」

若干、感づき始めている簪だった。

「どうした、一夏ー避けているばかりでは勝てんぞー。」

「分かってるよー。」

「とは言つてもラウラは一対一では反則的に強い。AHCに捕まつたら終わりだ。」

一夏はラウラのAHCに警戒しそぎて居る為先程から、一度も攻撃はしていない。

ラウラは積極的に攻撃をしてきた。

「そろそろ行くか？ 雪片ー。」

「どうした、一夏ー丸腰の状態で勝てるとも思つて居るのかー。」

「な訳あるかー。」

そう強気になるが異変が生じていた。

「何でだ！ 何で、雪片式型が出ない！ 異常もないのに何でー。」
実は一夏は武装が出せないでいた。

「くそー！ 雪羅だけで戦うしかねえのかー。」

「カノンー。」

「当たるかそんな物！。」

ラウラは放たれた雪羅のカノンを避け、一気に一夏に近づいた。

「はあー！」

「くそー！」

ラウラがエネルギー手刀で切りにかかるがそれをクローモードで弾いた。

「一夏、雪片式型はどうしたー。」

「気にするなー。」

そのまま、戦いは継続された。

「珍しいな。一夏が雪片式型を使わないなんて」

「それも、そうですわね」

「エネルギー消費の多い雪羅を使つて向して居るのあこつはー。」

「あー？」

「籍はどう思つ?」

— 1 —

一
箇
?

「え？ あ、うん。 まあ？」

ふん
変な簪

「さうぞ、一夏うろたえていたような気がしたけど、
氣のせいかな？それに普段なら雪羅のクローモード何で、
めったに使わないのに」

「アーティストが織りなす世界」

「終わつてたまるか！」

「ニヤソバは一回、これでも尚て「いざ券」とる」

「終わりだ！」

「終わるのはお前だ！」

一夏は最大の瞬時加速でラウラに近づき、クローモードを

ଶାର୍କାରୀରେଖା

גָּמָן

第三回 亂世の舞闇

「な！ エネルギー切れ？」

「隙ありだ！」

当たる瞬間にエネルギーが切れクローは消えてしまい、AICに捕

いたりあつていた。

「アリババ」夏?

「金剛」の力の「金剛」

「情けないぞー！もう少しエネルギーにも気を配らなければいかんぞー！」

私の嫁であろうが！」

の、嫁、嫁つていつからお前は俺の嫁になつたんだ？そつちがこつち

意見も聞かず勝手に語つてゐるだけだろうか！

「靈一派」的「靈」

— 亂してしまったのか！ — 夏！

「ああ！聞いてるだろが！分からねえのか！」

！」！」！」！」

二、政治、立憲問題

卷之五

卷之二十一

そのまま、行つてしまつた。

「何故嫁はキレたのだ？」

「さあ？」

۱۱

そこでですね

לְפָנֵי תְּמִימָה וְלְפָנֵי תְּמִימָה.

恋は眞田と詰つが間違つた方向に行くと、

また、Iの少女達は氣にしてはしなかった。

第七話 バラカラ そして怒る一夏（後編）

「こんにちは～ケンです。
如何でしたか？
では、また今度～

第八話　VS等 そして浮き彫りになる異変

一夏は整備室でエネルギーを補給していた。

「くそが！何さまのつもりだ！あいつらは！」

今までの事にキレていた。

「何が男が女に負けて情けないだ！代表候補生と一般生徒の実力の差が、

分からねえのか？それともただ単に俺を使って誇示しているだけなのか？

篠もそうだ。あいつが勝てるのはあのチートみたいな

ワソオファビリティー

単一使用能力のお陰だろ？が！

それがあたかも自分の実力みたいに言いやがつて！

補給も終わりアリーナに向かっていると千冬に会った。

「ちふ、じゃなくて織斑先生」

「ん？一夏か、今は職務外だ。いつも通りで構わん」

「そう」

「ああ、そうだ。一夏」

「ん、何？千冬姉」

「最近お前、あいつらに負けていろいろうじやないか」

「・・・・・」

「そんなのでお前の言つている事が出来ると思うか？」

「・・・・・・」

「それに最近、授業でも失敗ばかりだな。何かあつたのか？」

「別に」

「そりが。なら良い。これからも励めよ？期待してるんだからな」

「そつ言い千冬は一夏にしか見せない笑顔で通つて行つた。

いつもなら嬉しくなるのだが今ではただのプレッシャーの塊である。

「期待何かすんなよ。俺はあんたとは違うんだ」

「来たか。遅いぞ、一夏ー何をぼやぼやしてこらるのだー！」

「・・・黙れよ」

「何か言つたか？」

「別に、始めようか」

「うむ、そうだな」

「何が遅いだーこつちはわざわざ遠い所まで行つて戻つてきでんだぞ！」

だつたらお前のそのチートな絢爛舞踏で補給してくれよー！」

一方、簫の心情は・・・

「やつたーみやづやく、一夏と鬪えるー一夏に私の実力を見せる時だー！そうすれば、一夏も私に頼つてくれるーうん、うん」

恋する乙女な心情だつた。

「行くぞー！」

「・・・ああ」

簫は紅椿を展開し、一夏も今回は問題もなく白式を展開と同時に、雪片式型を開いた。

「どうかしたのか？」「

「い、いや何でもない」

「なら行くぞー！」

「ああ」

「今、念じていないので元にいつが出てきた。まるで遅れて出てくるよつこ

気のせいいか？まあいい、出たのなら何でも構わん」

「ねえ、一夏と簫じつちが強いと思う？」

「そうだな。どちらかと言つと簫の方が上だな

「ねえ、一夏と簫じつちが強いと思う？」

「まあね。絢爛舞踏を抜いたとしても篠の方が強いと思つ」
「あたしも篠ね。セシリ亞は？」
「わたくしも篠さんでしょうか？篠さんは才能がおあつのようにですね。

「簪さんはどう思こます？」

「私は・・・・・一夏かな」

「え？ 何で？」

「何でかは分からぬけどそう思つ」

「だが、今の状況もそうだが篠が既に一夏を圧倒しているが？」

「どうしても、私は一夏だと思つ」

「ふうん」

「はああ！」

篠は一本の刀で一夏を攻撃していくが、一夏は避けてはいるがワンテンポ遅い反応だった。

「どうなつてんだ！白式の反応がいつもより鈍い！」

「どうした、一夏！動きが遅いぞ！」

「分かつてゐよ！」

一夏が雪片式型で攻撃しようとした瞬間・・・

「な！」

突然、雪片式型が消えた。

「何をしている一夏！何故、武器を直す！」

「知るか！勝手に戻つたんだ！」

するとオープニングチャンネルを通じて皆の声が聞こえてきた。

『どうした一夏！』

「勝手に武装が戻つたんだ」

『一応、整備室で確認してみよつか？』

「ああ、分かつた」

始まる異変。

そして、少年の運命はここから分かれていく。

第八話　VS等 そして浮き彫りになる異変（後書き）

こんばんわ、ケンです
如何でしたか？
それでは、御休みなさい

第九話 黒い感情の具現化、そして始まる異変

「誰も知らない会話」

「な、何なの！あなたは！」

「私は彼の黒い感情が具現化したもの」

「彼の黒い感情？」

「そうよ」

「こんな所に何の用？」

「別に今は何かをする訳ではないわ。

ただ貴方達は彼を全く理解していない」

「どういう意味ですか？」

「私達は貴方よりは理解していると思うけど？」

「ふふふ、まあ良いわ。私はまだ主人公ではない。傍観者よ

「？？？」

「ねえ、知ってる？人間にはパターンがあるのよ？」

「パターン？」

「そう、どれだけ努力しても意味のない人間、

努力を知らない人間、努力を諦める人間

そして、努力をして成長する人間。彼はどれだと思う？」

「勿論、努力をして成長する人間だよ」

「私も同感です」

「ふふふ、違うんだな～」

「「え？」

「彼はね憎しみで強くなる」

「やつですね。」このデータを見る限りは特に異常は見当たりません。今、白式は整備室で整備課のトップ達に見てもらっていた。

「でも、確かに勝手に雪片式型が消えたんです！」

「とは言われてもね～」

「武装が搭乗者の意思に反してクローズされるつてのは無いんだけどな～

本当に勝手にクローズしたの？」

「ほ、本当にですよ！」

「ひとまず、簪ちゃんと本音ちゃんは残つて頂戴。後はみんな帰つていいわよ」

「お、俺も手伝いますよ！」

「良いわよ、別に。一夏君は何もわからないでしょ？」

「…………」

「あ、後、代表候補生の皆さんにも残つてもいいおつかしうらね」

「良いぞ別に」

「分かりましたわ」

「はい」

「分かつたわ」

「それと、篠ちゃんてお姉さんと連絡できるかしら？」

「ええまあ」

「じゃあ、連絡お願いするわ。私達だけでは分からぬからね」

「分かりました」

「じゃあ、一夏君は帰つていいわよ。お疲れ様。ゆっくりしてね」

「…………はい」

「やっぱり俺は皆にはいらない存在なのか？いや、そんな筈はない！この世にいらない人間はいない！それにただ、俺に知識がないだけであつて、

あいつらは代表候補生で俺なんかよりもT-Sの事を知つていいから、

残されたんだ。そうだ、きつとやつだ。
でも、本当にそうなのか?」

一夏は若干人間不信に陥っていた。

「は〜何で俺がIS何かを動かすんだよ。俺なんかよりも、
頭のいい奴が動かせばよかつたのに。
ま、もつと勉強すれば良い話か。

あんなのただの被害妄想だな。よし、勉強するか!—
己を奮い立たせ一夏は部屋へと向かつていった。

「お姉ちゃん」

「ん、何かしら? 簪ちゃん
「あの言い方は無いと思つけど」
「そうかしら? 一夏君に任せることがないからああ言つたまでだけど」
「そう」

簪はそのまま画面を流れる膨大な量のデータに視線を戻した。

「ほら見なさい! 一夏はどんな事があつてもくじけないんだよ」

「そうです」

「ふふふ、今はただそういう風に見えるだけ。
もうじき彼も気づき始めるわ。

彼女たちに抱いているこの黒い感情にね」

第九話 黒い感情の具現化、そして始まる異変（後書き）

こんにちは～ケンです。

如何でしたか？

少し樋無の発言がきついとは思いますが、ご承知ください。
ちなみにこの話で言うと作者は、
下から見たら最高、上から見たら最弱です
では、さよなら～

第十話 その胸に抱く感情

考査も無事に終わり、白式も異常はないとのことで帰つて來た。

今日は考査の返却日だった。

「では、テストを返す。名前の順で来い」

「うーうーふ者、落ち込む者など様々だった。

「あれだけ勉強したんだ。結構いい線は行つた筈」

「織斑」

「はー」

「もつと精進しろよ?」

「は?」

答案用紙に書いてあつたのは全て40といつ数字だった。

「なー」

「この学年で平均が40台なのはお前だけだぞ

つまりは最下位と言つ事になる。

休み時間になるといつもの皆がやつてきた。

「どうした、情けないぞ! 一夏!」

「そうだぞ! 私の嫁だらうが!」

「にしてもひどい点数ねえ。どんな勉強したのよ

「皆はどうだつたんだよ」

全員が40という点数は無く、どれも80以上。
最低でも70はある。

「簡単だつたでしょ。今回の問題くらー」

「そうだね。前に比べると易しかつたかな」

「お前らと一緒にすんなよ。俺はお前らとは違つて…」

「ねえ、一夏。この後で模擬戦でもどうかな?」

「結構だ」

「え?」

「どうせ負けるのにする意味ないだろ?」

「で、でも一夏だつていい線行つてるよ？」

「そ、そうですわ」

「思つてもない事を言つなよ。見苦しいぞ。

とにかくこれから俺は模擬戦はしない

そのまま一夏は帰つてしまつた。

「何かあつたんでしょうか？」

「さあ」

「くそ！」

一夏は部屋に着くなり答案用紙を投げ捨てた。

「何で！ 何で、あんなにしたのにこんな点数何だ！」

勉強方法だつて変えた。何冊も参考書を解いたのに何で！

それから一夏はベッドで横になつていて。

△努力は人を裏切らないつて言つけどそんな訳ないか。
才能はある奴は裏切らないつてことかよ

「あ～もう一気分転換に散歩に行こう。

あいつらに見つからぬように。

見つかつたらまた付いてこられる

一夏は着替え外出の許可をもらひそこら辺を散歩し、
公園のベンチに座つていた。

△やつぱり俺は才能がないのか？ そういえば昔から努力しても、

何もしてない奴に負けてばつかだつたけ？

剣道だつてそうだつた。毎日、遅くまで竹刀を振つた。

お陰で筋肉痛になつてまともに動けない日もあつたな。

それで、箒と試合すると一本負け。

△といえば、努力が足らんぞ！ つて言われたつけ？

「ははつ！ 僕は何をしても無駄だな。

時間が無駄つて言われても仕方ねえか

一夏は今までの事を思い出し自虐の思いで笑っていた。

「隣良いかしら?」

「ええ、どうぞ」

「そう言えばこんな事、前にもあつたような?」

そう思いとなりをふと見ると・・・

「スコールさん!」

「ふふふ、久しぶりね? 織斑君」

「久しぶりつてもこの前に会いましたよね?」

「それもそうね」

それから少し一夏はスコールと話していた。

「ねえ、悩みもあるのかしら?」

「え?」

「いや、さつき難しい顔をしてたから」

「別にそんなに深い悩みじゃありませんよ」

「まあ、そう言わずにお姉さんにお話してみなさい」

「・・・実は最近焦つてるんです」

「焦つてる? 何に?」

「自分の成長にです」

「そう言えばIISを動かせたつけ」

「ええ、それで俺は皆を護りたいのにどれだけ特訓しても強くなつた気が、

しないんです。代表候補生の皆には勝つたことないし、専用機持ち

じゃない人とかに、

負けかけたりとか

「そう。それで貴方はどう思つてゐるの?..」

「え?」

「彼女たちにどんな感情を抱いているの?..」

「俺は・・・・・」

「ふふふ、まあゆっくり考へなさい。」

もし、気付いたらここに電話して頂戴」渡された紙には電話番号が書いてあった。

「これは？」

「気付いてからのお楽しみよ。もし気がつかないんだつたら、そのまま焼却して頂戴。良いわね？」

「はい」

「ふふ、良い子は好きよ。じゃあね、織斑君」

そう言い残しスコールは人ごみに消えていった。

「俺があいつらに抱いている感情・・・」

渡されたメモ用紙をポケットに入れ、一夏は再び歩き出した。

「あ、もしもし？ 私よ

『どうかしたのか？』

「ふふふ、良い人材が見つかつたわ」

『人材？ こっちにか？』

「そうよ。まだ気づいていないけど気付いたら、きっと彼はこっちに来るわよ。力を求めて」

『悪いが言つてる事がよく理解できないんだが』

『まあ、それもそうね。まあ楽しみに待ちましょ。』

もうそつちに帰るから迎えをよこして頂戴。オータム

『分かった』

そう言いオータムと呼ばれた女性は電話を切った。

もしも、一夏がこの日散歩などに行かず皆と模擬戦を

していたらこの女性とも会わなかつた。

そしてあんな事にもならずには済んだであらう。

少年の心にあるものは何なのか？

それは少年が気づくべきではないものなのかも知れない。

第十話 その胸に抱く感情（後書き）

ここにちわ～ケンです。

ようやくテストも残り一日です。
でもその後に校外学習が・・・
めんどくさいです。

それはさておき如何でしたか?
感想もお待ちしております。
では、さよなら～

第十一話 裏切り

一夏はベッドで横になりながらスコールに言われたことを考えていた。

「俺があいつらに抱いてる感情？別にあいつらは誰の友達だし、これといって仲が悪いという事でもない。」

まあ、たまにうざことは感じるけどそれ以外は特に、ちなみに現時刻は6:30。

昨日は早くに寝た為こんな時間に目が覚めてしまったわけである。

「一夏、朝稽古に行くぞ！」

静かだつた部屋に凜々しい声が響いた。

「またかよ。そんなにお前は俺に強さを見せつけたいのかよ」

「今日は起きているな。では、行くぞ！」

「行くこと前提かよ。は～うぜえ」

そそくさと服を着替えているとある事に気付いた。

「あれ？俺さつきあいつにうざこつて思つたよな。いらいらもしてんし。ま、いつか」

そのまま剣道場へと歩いていった。

「面！」

「うえ！」

「だらしないぞ！一夏！前から思つていたが最近、不撓生なのではないか？」

「は？」

「田の下にくまも出来てるし、この前のテストも遊び呆けていたのではないか？」

「お前に何が分かるんだよ。俺は人より何倍もしなきゃ出来ないんだよ！」

何でもできるお前と一緒にするな…」

「聞いているのか、一夏…」

「ああ、聞いているよ」

「それに剣道の腕も鈍っているのではないか。それでは、いつまで経つても、あの頃のように勝てんぞ…」

「あの頃・・・・・めんど」

一夏は防具を脱ぎ更衣室へと歩いていった。

「おい、一夏…ど」に行く…」

「帰るんだよ。やつても意味ないだろ?」

「どういう意味だ」

「運動つてのは才能がある奴がするもんなんだよ。俺みたいに才能がない奴は、

やつてもやらなくても同じ。時間の無駄」

「お前は努力の何を知っている。努力は人を裏切らない!」

「それは才能がある奴だけに言える事だ。それに努力なんてもんは無駄なだけだよ」

「そんな事はない!」

「そうなの。俺は体験したから言えるの」

「だ、だが」

「だがもへつたくれもないの。じゃあな
もう俺を誘わなくとも良いぞ。遅れるなよ~」

「い、一夏・・・・」

「あ~いらっしゃく。朝からいらっしゃくとか最悪だ。

あいつは経験した事がないからそう言えんだよ」

廊下を歩いていると何人かの女子生徒の声が聞こえてきた。

「朝っぱらからうつせえな。教室でしゃべれよ、教室で

そのままいらっしゃきながら教室へと向かっていった。

「あ、おはよう一夏!」

「おはよっ」

「凄い寝癖だよ？直してこなかつたの？」

「良いだろ？別に俺は気にしない」

「一夏が気にしなくても周りは気にするよ。ほらまだ時間もあるから直してきなよ」

「めんどくさいからいい」

そのまま一夏は座ると机につつ、ふし眠りに入った。

つぎに田が覚めたのは頭に鈍痛が走った。

「痛！」

「馬鹿ものー。いつまで寝てこい、授業を始めるだ。号令だ」

「はいはー。起立、礼、着席～」

休憩時間になりトイレに向かってみると
女子たちの喋り声が聞こえてきた。

「いらっしゃ。教室でしゃべれよ」

そのまま通り過ぎようとしたが自分の名前が聞こえ足を止めた。

「ねえ、織斑君てさずるくない？」

「あ、分かる。男だからって専用機渡されてさー」

「やうやう。それに噂によると織斑君、EISを使えなくなつたらしく

よ

「えー本当？」

「ほんと、ほんと」

彼女たちの言つとおり一夏は授業中に展開しようとしたが
白式が起動できなくなつていた。

しかし、訓練機は使えたので追い出されはしなかつた。

「ははー。じゃあ、織斑君がここにいる意味ないじゃん！」

「ほんと、ほんと。それにシスコンだから嫌いなんだよね～」「あ、分かる～」

「「「はははははははは」」

そのまま女子生徒達は教室に戻つていつた。

一夏は教室とは逆方向に向かつていた。

「くそ！何なんだよ、あいつらは！」

人の氣も知らないで！俺だつてな専用機何か欲しくもないんだよ！それなのにデータが欲しいからつて与えられて。

いらないんだよ！

一夏は授業をさぼり自室にいた。

「憎い、憎い、憎い、憎い！」

あいつらが憎い！殺したいほど憎い！

俺を物みたいにふりまわすあいつらが憎い！

一夏はふとスコールの話を思い出した。

『貴方が彼女たちに抱いてる感情に気付いたらここで電話してきなさい』

一夏は机に置いてあつた紙を取つた。

「どうか、分かつた。俺があいつらに抱いている感情が。

俺はあいつらが憎い！殺したいほど！」

一夏は迷わずにその番号に電話をかけた。

「もしもし」

「はい。織斑一夏様ですね？要件は承つております。スコール様につなぎますので、少々お待ち下さー

数分するとスコールが出た。

「あら、織斑君。これに電話したつて事は気づいたのね？」

「ああ、気づいた。俺はあいつらが憎い！殺したいほどなー

「ふふふ、それで良いわ。これから言つ場所に行きなさい。

迎えをよこしてあるから。誰にもばれずにね」

一夏は着替え言われた場所に行くと黒塗りの外車があつた。
そこには老人が一人立つていた。

「織斑様ですね？」

「ああ

「お待ちしておりました。お乗りください」

車に乗り1時間ぐらい走りある場所で下ろされた。

「スコール」

「はい。待つてたわよ」

「何でこんな所に」

「私は亡国機業なの」

「あつそ。それで？」

「驚かないのね。いいわ織斑君、亡国機業に入りなさい

そうすれば力が手に入るわ。どうする？」

「そんな事を聞くなよ」

「ふふふ、ようこと！亡国機業へ歓迎するわ織斑君」

一夏はスコールの手を取つた。

少年の運命が動き出した

第十一話 裏切り（後書き）

「こんにちは、ケンです。

ようやくテストが終わりました。

如何でしたか？

一夏がとうとう「国機業」に入りました。

では、さよなら～

第十一話 変わっていく日常

今、一夏はスコールに連れられ建物内部にいた。

「ここは何なんだ」

「ここは亡國機業の内部よ」
ファンタムタスク

「だが、表には株式会社と書いてあつたが」

「それは表向きよ。表で金を稼いでその金を裏で使うのよ」

「そう言う意味か」

「ええ、まあね。ここに入るわよ」

スコールがドアを開けるとそこには一人の女性が機械をいじりながら聞いてきた。

「遅かったなスコール。人材とやらは連れて来たのか？」

「ええ、連れて来たわ。ひとまず見て頂戴」

「ああ、わか……お前、何でここに……！」

「オータムだつたか？」

「呼び捨てしてんじゃねえよ！くそ餓鬼！」

「まあまあ、二人とも落ち着きなさい」

「お前の言つていた人材つてのはこいつの事か！」

「ええ、そうよ。期待の新人さんの織斑一夏君」

「何でこんな奴を」

「彼はねIS学園に恨みがあるのよ」

「信じれるか！」

「ん、頑固ね。まあ良いわ、ひとまず織斑君は今日のところは帰りなさい」

「ああ、分かった」

「また後日、連絡するからその時は今日来た所に来て頂戴。迎えを置いておくから」

「分かった」

そのまま一夏は帰つて行つた。

「スコール！ 何であんな奴を裏側いづちに入れんだ！ あいつは表側あつちの人間だぞ！」

「それは過去の話よ。分からなかつた？ 彼のIFS学園つて聞いた時の雰囲気、今までとは違つてたでしょ」

「そ、それはそうだが」

「まあ、そのうち信じられるようになるわよ」

一夏はその後IFS学園に戻り、授業をさぼつて怒られた事以外には何も無かつた。いつものメンバーに聞かれたりもしたが適当にあじらついていた。

そして何事もなく夜を迎えて寝つた。

「ここはどこだ？」

一夏は今、自分の知らない場所にいた。辺りには何もない。

「ここは貴方の心の中のようなもの」

「誰だ、お前は！」

「んもう！ そんなに殺氣立たなくともいいじゃない。私は貴方なのに」

「何？」

「違うわね。貴方の闇くろいつて言つべきかしら」

「俺の闇？」

「そう、貴方が彼女たちに抱き続けた負の感情が集まり私が出来たの」

「負の感情」

「そう。貴方が織斑千冬や専用機持ちのメンバーに抱き続けているものよ」

「ですか。で？ 何の用だ」

「ふふ、貴方に質問があるの」

「質問？」

「そう質問。貴方はどんな力が欲しい？」

「どんな力・・・？」

「そう」

「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！」

全てを燃やしつくす炎のように何ものにも消されないような力が！」

「ふふ、合格よ。また会いましょ？」

「お、おい待てよ！」

そのまま消え去ってしまった。

「ん？」

次に目を覚ますと朝日が眩しかった。
つまり今は朝という事になる。

「ふああああ～今何時だ～？」7時ちょ'つどか

そのまま一夏は服を着替え食堂で朝食を食べて教室へと向かった。

「あ、おはよう一夏！」

「ああ、おはよ」

〔朝つぱらからテンション高過ぎ。頭に響く〕
「ねえ、一夏」

「ん？」

「今日の放課後に模擬戦しない？」

「は～忘れたか？俺はもう専用機持ちじゃない」

「覚えてるよ。でも訓練機を使っても模擬戦は出来るでしょ？」

「あ～つまり」いつは自分が一番訓練機のラファール使えるから
教えてあげるつて事か」

「いやいい」

「あ、もしかして会長さんとの放課後特訓があつたっけ？」

「そう言えばそんなのあつたな。最近行つていないけど。これを使
わせてもらひうか」

「ああ、あつたな」

「そつか、ごめんね」

「別に」。で、要件はそんだけ?」

「つ、つん」

「あつや。んじや」

そのまま一夏は教室へと向かっていった。

「最近、一夏の態度がよそよそしく感じるのは気のせいかな?」

〔そう言えば最近、生徒会も行つてねえな。忘れてた〕

放課後へ

「こら、一夏君! 遅刻よ」

「すいません」

「じゃあ、今日は」

「楯無さん」

「何かしら?」

「俺が専用機持ちじゃないつて知つてますよね?」

「ええ、まあ」

「じゃあ何でまだやるんですか?」

「それは訓練機を使えば」

「訓練機は予約も大変です。ですので今日で終わりにしましょう」

「え?」

「楯無さんも生徒会で大変なのに訓練機ではあります。ですので特訓はもう結構です」

「い、いやでも」

「楯無さんも俺を鍛えるより籌を鍛えた方が楽しいでしょ?」

「・・・・・」

「図星ですね。俺を教えてるときあくびとかしてましたもんね」

「あ、あれはつい」

「でも籌の時はそんの一度もありませんでしたよね?」

「・・・・・」

「て言う事でもう結構です。今までありがとうございました」

〔そう言つて一夏は帰つて行った。〕

「一夏君・・・・

アリー・ナには樋無のつぶやきがひどく聞こえた。

第十一話 変わっていく日常（後書き）

どうも～ケンです。

如何でしたか？

原作の一夏つてあんなに振り回されてんのによくキレイななとつくづく思ってます。

では、さよなら～

第十二話 死ねない訳

放課後の特訓をやめてから数日が経った。

あれから樋無が何度か一夏のところに説得に来たが樋無も諦めてもう来なくなつた。

「は〜」

「どうかなさいましたか？会長

「虚ちやん」

生徒会室で虚と樋無が一人で駄弁つていた。

「そういえば最近、織斑君来ませんね。何かあつたんでしょうか？」

「一夏君は・・・・辞めたわ

「え？ 本當ですか！」

「ええ、昨日一夏君の部屋に行つたらそう言われたわ。もつ俺は生徒会にもいかなつて」

「最近、彼も色々とありましたから精神的にも疲れてるのでは？」

「そうかもしだいけど・・・・」

「ここは放つておく方がいいかもせんね

「そうかな〜」

一方その頃、一夏はスコールに呼ばれ亡國機業ワントムタスクにいた。

「何か用か？スコール」

「まあね、ひとまず今日と明日を使って貴方を鍛えるわ

「俺を？」

「ええ、そうよ

「どうやつて」

「それは・・・

「お前が私と鬭うんだよ！」

上から声が聞こえた。

「オータム」

「呼び捨てすんなつて言つてんだうが！」

「アラクネ直つたのか？スコール」

「まあね。まだ、戦闘は無理だけじ貴方を鍛えるぐらじはできるわよ」

「で、どうすれば良い？」

「生身で戦いなさい」

「は？」

「武器はそこいら辺に落ちてるのを使えばいいわ。

また30分後に生きて余りましょ？」

「じゃあ、ひとつとと始めるぞ！こそ餓鬼」

「ああ」

「さてと、貴方は本当に使えるか否か。試させてもらうわ、一夏君」
スコールは別室のモニターで戦いの様子を観察していた。

オータムは蜘蛛のような足を使い一夏に向けて動かしたがそれを一夏は避けて足もとに転がつて銃を一丁取り発砲した。

「ぐつ！これISの武器かよ！」

ISの武器を生身で使うとなると普段はISによつて中和されている衝撃が全てフイードバックする為かなりの激痛が走る。

「隙ありだ！」

「しまつ」

慌ててもう一度撃とうとするが遅かった。

「がはつ！」

そのままアラクネの足に吹き飛ばされ壁にぶつかった。

「ひやはははは、どうだ！お前みたいな餓鬼が来るといじやないんだよ！」

「さつさとかえ・・・！」

オータムは言いかけた言葉を思わず止めてしまった。

目の前の一夏がまだ立っていたからだ。

そして、その一夏から強烈な殺氣がとんできた。

「俺が、一それはオーダムすら恐怖する程の殺氣だった。

15

! ! ! ! !

「俺はあいつらを潰すまで死ぬわけにはいかない！」

どんな事があつても俺は勝つていぐ。あいつらをぶち殺すまでわな

ヨリヅムガラニ

勿論、ISの武器を。

「…さあ今まで衝撃でビビッてた癖に何で今は両手で持てる

んだよ！

刃のこは流毒と叫び毒が響いていた。

30 分後

「はあ、はあ。ようやく倒れたか」

一夏は大量の血を流しながらかるうじて生きていた。

「がああ。ぐう

それでもなお一震せ立ひやうかぬ

しかし、ダメージが大きかつたのかそのまま気を失ってしまった。

۱۷۷

オータムも緊張が切れそのまま座り込んでしまった。

「凄いわ」

「スコールか」

「まさか生身でエスをここまで追い詰め、そしてあの殺氣。
ふふふ、やっぱり私の田に狂いはなかつた」

「こいつを入れるのか？こっちへ」

「ええ、さつきの戦いで貴方も認めたでしょ？」

「まだ、認めてはいないがお前の目に狂いはないんだろ？
なら、こつちは何も言わないがあいつがなんて言うか」

「エムか・・・まあ彼女も認めるでしょ。」

ひと先ず彼を医務室に運びましょ？」

「ああ」

そのまま一夏は医務室に運ばれ一命を取り留めた。

動き出した少年の運命

少女達はそれに気付かず日常を過ごす。
ただ一人を除いて。

やがて、この少女は大きな選択をする。

第十二話 死ねない訳（後書き）

こんばんわ～ケンです。

人が傷つくことには人はとても鈍いです。
作者も経験した事があります。

如何でしたか？

というより「国機業に医務室とかあんのかな（笑）
あるという設定でお願いします。
それではさよなら～

第十四話 全てを燃やしつぶす炎

一夏は夢の中にいた。

「また、ここか」

「はい。お久ー」

「お前」

あの時の少女が現れた。

「また会ったね。まあ、私が呼んだんだけどね」「で？ 今度は何の用だ？」

「貴方に質問よ。どうして貴方は白式を使えなくなつたと思つ？」「そんな事はどうでも良い。もつ過去の話だ」

「あら、冷めてるはね。まあ良いわ教えてあげる。貴方の心の闇、つまり私が生まれて白式を侵食したからよ」「そうか」

「それともう一つ質問があるの」

「何だ？」

「貴方はどんな力が欲しい？」

「力・・・・」

「そう」

「俺はあいつらをぶちのめす力が欲しい！
全てを焼き尽くす炎のような力が欲しい！
その為なら何だつてしてやる！」

「ふふふ、分かったわ。また会いましょ
「ちょっと待て！お前は誰だ！」

「私は よ

「ん？」「は」

田が覚めると包帯を巻かれた状態でベッドに横たわっていた。

「ここは医務室だ」

「オータム」

「お前、ほんとに死にかけたんだぞ。医者が言つては一度心臓が止まつたらしー」

「そうか。それより今何時だ」

「今は日が開けて日曜日の夜中だ」

「そうか・・・お前、1日中いてくれたのか?」

「けつ!馬鹿言つな、スコールが用事で留守だから私がしてゐるんだ」

「そうか」

「まだ寝てる。明日も鍛えるんだからな」

「ああ、そうする」

再び一夏は意識を落とした。

翌日

「あら、おはよう。一人とも」

「ああ、おはよう」

「ああ」

上からオータム、一夏である。

「元気そうね、一夏君」

「ああ、お陰さまだな」

「じゃあ、今日はーしを使って鍛えましょー。担当は私がするわ

「・・・そうか」

そう言いガントレットに手を当じた。

〔展開してくれよ〕

「白し!—」

一夏が展開しようとした時、突然ガントレットから黒い炎が噴き出した。

「な、なに!?」

「何だ、それは!ガキ!」

「知るか俺が聞きたい！」

その炎は一夏の腕を一気に飲み込んだ。

「ちつ！ オータム、 すぐに消火器を！」

「あ、ああー。」

「いらねえ！」

Γ Γ ! ! !

「で、でもそうしないと貴方が！」

え！

それを最後に炎か

夏君

ノボリ・サガラノサニ

「今度は何なの！？」

そこには黒いISを纏つた一夏が立っていた。

「二二の本巻のハハ別の黒」
「ラックファントム

「まつやまの新しいえの見紹

その姿は全てが黒一色

「俺と闘え、スコーレ

「待ちなさい。一旦そのISを解析してから……」

俗と闘う――

・・・・・ 分かってたわ 後悔しなしてね?」

オーダム SIDE

今一人が戦っている。

今はスコールが有利に戦ってるがあいつが何も攻撃せずに

全て過にてしる

あれでも亡國機業のなかでは1・2を争う腕の持ち主だ。

そこらの代表よりも強いスコールの攻撃を全部
避けてる事態が凄いがあいつは何で何もしない。

「いつまで、避けてるつもりなのかしら！？」

「攻撃しないと勝てないわよ！」

「・・・そうだな。ようやくこいつの

全てを理解したから仕掛けるか」

そう言い一夏は黒炎で刀を形成しスコールに切りかかるが
スコールはそれを剣で防いだ。

「どうしたの？こんなもの？」

「そう焦るな」

その瞬間、炎が剣を伝つてスコールのISに燃え移つた。

「な、何なの！？この炎。消えないじゃない！」

「そいつは黒幻の^{グラックファ}_{シカオフアビリティ}单一仕様能力の

操炎者により生まれたエネルギーを喰らう炎」

「エネルギーを喰らう炎？」

「そうだ。そいつがISに着火すればエネルギーを喰らいつくすま
で、

消える事はなく喰らえば喰らうほど勢いは強くなる。
単純に炎としても扱える」

説明通り炎は喰らい続けスコールの

ISのエネルギーはさらに減少スピードが跳ね上がった。

「・・・負けたわ」

スコールが負けを認めたと同時に一夏は炎を消した。

「凄いわね、そのIS」
「まあな、でも欠点もある」
「欠点だと？」

先程まで避難していたオータムも話に加わった。

「ああ、黒幻はこれしか武装がない」

「つまり逆に言えば武装を追加できないの？」

「ああ、使うならできるが拡張領域^{バルスロット}が無いから使い捨てないといけない」

「それで能力が他を圧倒してるのね」

「まあな」

「だが、これからどうすんだ？」

「何がだ？」

「お前はEIS学園に在学してるから授業で

展開しないと怪しまれるぞ」

「ああ、その件は大丈夫だ」

「どうして？」

「こここの構造は白式と同じだ。それに俺は白式を展開できなくなってるから怪しまれることはない」

「ちょ、ちょっと待て！」

「何だ？」

オータムが声を荒げた。

「だつたらお前は昨日の特訓で絶対防御無しで戦つたってのか！」

「ああ、まあな」

「は～そう言う事は早めに言ひなさい。特訓も内容を変えたの」「そうだな」

「ま、ひとまずは力も手に入れた事だしオータムは良いわね？」

「ああ、文句はない」

「??？」

「織斑一夏君ー」

「なんだ？」

「改めて歓迎するわ、ようこそ亡^{フアントムタスク}国機業へ！」

「ああ！」

一夏はスコールの手を取り握手をかわした。

この日、この世界からある物が消失しあるもののが出現した。

それは誰も気づかない事。

ここから少年の復讐劇は始まる。

美しかつた白は消失し、全てを闇に染め全てを燃やしつくす黒が現れた。

白の消失、黒の出現。

第十四話 全てを燃やしつゝ炎（後書き）

こんにちわ～

如何でしたか？

よつやくオリエイチを出せました～

設定も近く出します。

それではよな～

第十五話 少年の諦めと少女の涙

あれから一夏はメテイカルチェックを終えてEIS学園に帰ろうとしていた。

「ちょっと待ちなさい。一夏君

「何だ、スコール？」

「貴方にはこれから任務を言い渡すわ」

「任務？まさかEIS学園の内部データでも流せとか？」

「あら、感が良いわね。正解よ」

「それだけ？」

「後、月一で良いからこっちに顔を出して頂戴。

その時に任務があれば言つわ

「分かった」

そのまま一夏は車に乗り帰つて行つた。

「お疲れ様でした。織斑様

「ああ、貴方もありがとうございました」

一夏は学園の帰路の途中でいつものメンバーと遭遇した。

「げ！何であいつらがここにいるんだ！」

一夏は見つからぬ内にその場から離れようとするが・・・

「あ！一夏！」

「は～最悪」

案の定見つかつた。

「こんな所にいたか。どこにいたんだ、昨日はー。」

「俺の勝手だろ」

「嫁は夫と共にいると聞いたぞ！」

「誰だよ、こいつに間違つた日本のオタク文化を入れた奴」「でも、本当にどうしたの一夏？」

シャルが心配そうに聞いた。

「は～昨日は宿泊届を出したんだけど」

「何よ～言つてくれればいいじゃないのー。」

「やうだぞ、一夏ー！」

「やうですわ、一夏わんー！」

上から鈴、篠、セシリ亞である。

「何でお前に俺の予定を言わなきゃならん。お前達は俺の何なんだ？」

「放つておけよ。俺の勝手だろ」

「まあいい。ひとまず学園に戻るべや」

ラウラが一夏の手を持つて引きずり始めた。

「馬鹿言つな。俺はまだ用事があるんだよ」

「用事と言つても家の掃除だが・・・」

「異論は認めんぞ！お前には聞きたいことが山ほどあるからな。そのままこいつらのメンバーに学校まで引きずり入れてしまった。」

一夏の部屋

「で、何か用？」

部屋にはいつものメンバーと樋無となぜか千冬がいた。

「何かじやないわよ！あんた最近おかしごわよ」

「そうだぞ一夏」

幼馴染の一人が声を荒げた。

「別に何も変わつてないけど？」

「変わつたよ！急に僕たちとは模擬戦はしなくなるし会長さんとの特訓も辞めちゃうし

生徒会も辞めちゃつたし、何かあつたの一夏？」

シャルが心配そうに見つめた。

「別に何もない。ただ強いて言つなら氣づいただけかな？」

「何に気付いたのかしら？」

樋無が質問した。

「俺があ今まで皆を護るとか言つてたけど正直頭がどうかしてた」「どういふ意味だ？」

「どう一いつ意末だ？」

「そのまんまですよ織斑先生。自分の命は自分で護るのが普通だし才能があつてなおかつ皆みたいに強い奴が言う事ならば別に何も思わない。

「でも俺みたいに才能もない力もないような奴が言うても
唯のヒーロー「こうこしてるだけ」

やめたら水の泡だぞー! 「

七
七

「それに？」

「もう疲れた。何事にも

一夏の田は以前のよへ、口米かとせんでいたなかでた
「一夏郎、やつに費用をねらはるんではござらぬのか。出

?

「ん、何? 同情ですか? 会長さん」

「此種方法」即係「以子之矛，攻子之盾」。

「お前達みたいな才能がある奴には一生分からねえよ」

「才能がある奴は専用幾手こ入れて二カアヅイの奴こ負ふのが

?

—それは

誰も一夏に反論できなかつた。

「話は終わりか？なら出て行つてくれよ。俺寝るから」
そう言い一夏は寝間着に着替えて布団に入つてしまつた。
まだ数分後には全員、残つていただが一人また一人と出ていき
最終的に一人を残して出て行つてしまつた。

「何か用か？簪」

「一夏、何かあつたの？」

「さつきも言つただろ？何もない、ただ氣づいただけ」

「それでも！ それでも前の一夏なら諦めずに努力してた！
私にも前にそつ言つたのに、何で自分は諦めちゃうの？」

「簪・・・・」

簪は涙を流しながら一夏に訴えていた。

「ねえ、もうちょっと頑張りうよ。また皆と特訓しようよ」

「簪、俺はもう何やつても意味ないんだよ。

勉強もISも何もかも意味ないんだ」

「何で？何でそう考えるの？」

簪は何度も手で涙を拭うがその動作が意味を為さないほど
涙があふれていた。

「簪」

「え？」

一夏は泣いている簪をそつと抱き締めた。

「い、一夏？」

好きな人に抱きしめられ思わず簪は顔を赤くしてしまつた。

「簪。お前はこれからも頑張つていけ。お前には俺と違つて
才能もあるし勉強も出来るし何より、
お前には超えたい人もいるんだろ？」

「うん」

「だつたらこんな所で俺に合わせて止まるんじやなくて進み続ける。
そうすれば必ず超える事が出来る」

「なら一夏も一緒に進もうよ」

「いいや、俺は最初から無駄だつたんだ。

何もかも。生まれたことすら無駄だつたんだ」

その言葉を聞いて簪は一夏の頬を叩いた。

「一夏の馬鹿！もういい！一夏なんか知らない！」

そう言い残し部屋を出ていった。

『よかつたの？』

「ファンタム」

『あの子ならこっち側に連れてこれたんじゃないの？』

「いや、あいつはこっちに来てはならない。きっとあいつはこれからたくさんの人々に囮まれて生きていく。

そんな奴を潰す訳にはいかない。あいつだけはな』

『ふうん。良かつた、貴方の憎しみの炎は消えてないみたいね』

「当たり前だろ。俺はあいつらをぶちのめす！何があつてもな！』

『ふふふ、それで良いわ。それでこそ貴方よ』

「ああ、俺はあいつらを必ずぶちのめす！」

第十五話 少年の諦めと少女の涙（後書き）

「んばんわ～如何でしたか？」

「それでは、ちよなう～

第十六話 簪の決心

簪 SIDE

あの後、簪は部屋に帰り布団にくるまって泣いていた。

「何で気付かなかつたんだる。一夏があんなにも苦しんでたのに気づく」とすらできなかつた。助けてもらつたのに

簪の心の中では後悔の念と自責の念が入り混じつていた。

僅かながらに怒りも感じていた。

一夏が最後に言つた生まれた意味がないという発言を聞いたときは思はず

叩いてしまつた。今の一夏が前の自分とあまりに似ていたからだ。

「一夏に会つ前はわたしもずっとああ思つてた。

何で私は生まれたんだろう、生まれても意味がないのにって思つてた。

でも、一夏に会つて初めて私は生まれてよかつたつて思えた。
一夏がいるから今私がいるようなもの
そして簪は決心する。

「だつたら私も一夏を助ける！私を助けてくれた
時みたいに今度は私が一夏を助ける！」

翌日

「ふあああ～眠い」

一夏はいつも通りぼさぼさの髪の毛で食堂にやつてきた。
そこにはいつものメンバーも何人かいたが昨日の今日とあって誰も話にこなかつた。

一人を除いて

「お、おはよう一夏」

「ん？ ああ、おはよう簪」

「隣良いかな？」

「どうぞご自由に」

簪は遠慮気味に隣に座りチラッと一夏の顔を見ると頬がよく見ないと分からぬが赤くなっていた。そのまま何とも言えない空気が一人の間に流れた。

「ね、ねえ」

「ん、何だ？」

「昨日の言つてた事は本気で思つてるの？」

「昨日？ ああ、あの事か。ああ、本気だよ。

まあ、俺を生んでくれた人には感謝はしてるさ。

お腹を痛めて俺を生んでくれたんだからな

「じゃあ！」

「でも、俺は生まれても生まれなくとも左程変わらないんだよ」「そんな事ないよ。一夏がいなくなつたら悲しむ人だつている」「だろうな、でもその内忘れる。その程度の存在なんだよ」

一夏の目は昨日と同じで光がともつていなかつた。

笑つてゐるのに心の底から笑つていない、そんな感じがした。

「ま、お前は頑張れよ。俺は傍観しておくよ」

そつ言い残し一夏は食堂から出でていった。

授業中～

一夏はボケつとしながら授業を受けていた。

「何で簪は話しかけてくる。あいつらは話しかけてこなかつたのにあいつだけはいつも通りにこつちに来た。何故？」

「じゃあ、織斑君、答えて下さー！」

「へ？」

「織斑、聞いていたか？」

「聞いていませんでした。どこですか？」

教室に出席簿のいい音が鳴り響いた。

「まだ痛いし」

一夏はアリーナにいた。

いつものメンバーはどうやら模擬戦をしているようだ。
「よくやるね」あんなめんどい事を
ま、候補生だからか。よくあんなめんどい事をしてるよ

模擬戦をしている少女達の心情は同じだった。

今の一夏は戦意がないし、戦う力もない。
ただでさえ組織などに狙われているのに。
だつたら自分が一夏を護る。

少女達の気持ちは同じだった。

大好きな人のために力をつけ護る。

それから何日か経ち11月に入ろうかという時に電話が入った。

「はい、もしもし」

『私よ』

「どうかしたのか」

電話の相手はスコールだった。

『貴方に任務があるの。こっちに来れるかしら?』
「分かった。少し時間がかかるがそっちに行く」

少年の戦いが始まろうとしている。

第十六話 簪の決心（後書き）

「こんにちわ～ケンです。
如何でしたか？
それでは、さよなら～

第十七話 一夏の初任務

今、一夏はスコールから任務内容を聞いていた。

「で？ 任務内容は何なんだ？」

「任務内容は銀の福音の奪取よ

「福音か。懐かしいな」

「何でだよ」

オータムが割り込んできた。

「臨海学校でひと悶着あつたんだ」

「あつそ」

「それで俺一人か？」

「いや、今回は初めてという事もあるから彼女に行つてもううわ

「本氣か！スコール！」

「ええ、彼女にも会わせとかないといけないといけないから

「誰だそいつ？」

「ま、会えば分かるわ。もう直帰つてくれるし」

その時ちょうどアガ開いた。

「噂をすればね。エム

「なん・・お前！！」

「またこのパターンか」

「織斑一夏！……」

エムはISを展開し殴りかかって来たが一夏は炎の剣を出しエムに掠らせた。

「そんな物で何ができる…」

「さあな？」

エムはまだ腕が燃えている事に気付かなかつた。

「終わりだ！」

「終わるのはお前だ」

一夏が言い終わると同時にさらに激しく燃え始めた。

「な、何だこれは！？」

「ひとまずエムを直して頂戴、エム」

「ちつ！」

エムがエスを戻すと同時に炎が消えた。

「スコール！ どういう意味だ！？」

「こう言つ意味よ

「何故こいつがここにいるんだ！」

エムが声を荒げてスコールに詰め寄つた。

「彼はもうこちら側の人間。仲間よ」

「何！？」

「そう言つ意味だ。ま、よろしく頼む。先輩」

「ちつ！」

エムが出てこようとするがスコールが呼びとめた。

「待ちなさい、エム」

「何だ！」

「貴方に任務があるの」

「任務？ さつき行つたばかりだぞ！」

「まあね。彼の初任務について行つて欲しいの」

「ふざけるな！ なぜ私がこいつと行かなければならぬ！」

「まあそう言わずに」

「くそ！ さつさと来い！」

「了解」

一夏はエムに連れられ外に出ていった。

「意外だな。あいつが簡単に行くなんて」

「ま、何か問題は起こすでしょ？」

北アメリカ北西部、第十六国防戦略拠点地。

通称地図レイズドにない基地のはるか上空に二人はいた。

「へゝここにあれがあるのか」

一夏は感心したように呟いた。

「エムはこうと・・・・

「なぜ私がここに一緒に来なければならん…」
激怒していた。なんせ恨んでいる相手と一緒にこうと言わわれれば致し方ない。

「それよりもどうする気だ?」

「何が?」

「お前、顔を隠さずに行くのか?」

「ああ、そういう事」

「簡単に言うがお前は世界で一人しかいない
男性エス操縦者だと顔が割れたらすぐ」に捕まる

「へへ心配してくれてんの?」

「ふん!誰が貴様など心配するか!」

「へえへえ、まあそれに関しては問題はない

「何?」

一夏が顔に手をやると顔に黒い炎のような物が集まりだし
そして仮面が形成された。

「な!」

『どう?これでバレナイでしょ?』

一夏の言つとおり顔は完全に隠れており
なおかつ声も女性の物になっていた。

「・・・・・きもいぞ」

『分かってるわよ。でもこうしなことばれちゃうでしょ?』

「それはそうだが・・・・・」

『ま、良いじゃない。すぐに終わらせてくるわ、エム』

そのまま一夏は降下していった。

「織斑一夏、貴様の力を見せてもらひう。もし、私が必要ないと
判断した場合貴様を殺す!」

「よお、交代だ」

「ああ、すまない。今日も良い天気だな
「そうだな。ん? 何だこれ?」

「黒い羽?」

視線を上にあげた瞬間、何かが墜落したような音が響いた。

「な、何だ!?」

「分からん! 警戒しろ!」

「ああ!」

一人は銃を準備しつでも撃てるした。

『痛いわね』操縦ミスったかしら?』

『ほぞけ。貴方がわぞとしたんでしょ』『

『ま、そうだけど』

『だ、誰だ貴様は!』『こをどこだと思っている!』

『ん? さあ?』

『ふざけているのか!』

『別に! ま、目的はあるけどね』

『何!?』

『ここに凍結封印されている福音の奪取』

『な、なぜそれを!?』

『いちいちうるさいわよ』

そう言つた瞬間、兵士が吹き飛ばされた。

『ぐあ!』

『くそ! 応援要請!、応援要請! 6 - Dエリアに応援要請!』

『うるさい』

その一言で先ほどよりも大きな爆発が起き大勢の兵士が吹き飛ばされた。

『うわああああああ!』

『えつと、福音さん! どこなの?』

『馬鹿か。向こうに反応がある』

『オッケー』

一夏は黒い翼を展開し一気に突き進んだ。

その途中で何度も対 I S 用の兵器が来たが全て黒い炎により燃やしつくされた。

通路を抜けると天井が高い部屋に入った。

『あら？ ここどこかしら？』

そこらを探索していると目的の物が目に入った。

『あ！ 見つけ！』

それに手を触れようとたん光の矢が飛んできた。

『普通はこういう感動の場面では何もしないのが決まりよ？』

『そう言うわけにはいかないの』

そこには金髪の美女がいた。

『確か、貴方は・・・』

「ナターシャ・フィルスよ」

『ううう、で？ 何の用？』

「あの子は渡さない！」

立て続けに光の矢が飛んできた。

『凄いわねえ！ 生身で I S 用兵器を扱うとは』

『まあ、これでも鍛えてるからね！』

そして次第に狭い部屋に矢が充満していった。

『あら？ 逃げ場無し？』

「そうよ！」

一気にそれらが爆発した。

『進入者だつて聞いてどんな子かと思ったらこの程度ね』

そのまま帰ろうとした時・・・

『誰の事かしら？』

『な！ 何なのその炎は！？』

『こんなもの、おいしいおやつよ』

全ての光の矢が炎に喰われていた。

「くつ！」

もう一度撃とうとするが矢が発射されなかつた。

いや、その武器自体が炎によりエネルギー切れとなっていた。

「な！こんな事が！」

『余所見厳禁、火氣厳禁よ』

「しまつ！」

そのまま壁に吹き飛ばされてしまった。

「ぐう！」

『ま、良くやつたわ。でも私じゃなかつたらね』

そのまま一夏は福音を縛っていたエネルギーを焼き切り福音を担いだ。

『この子は貰つてくれね。ここにあっても宝の持ち腐れつてやつよ。知つてゐる？日本の・・・何だつたかしら？まあいいわ』去ろうとする一夏の足が何かに掴まれた。

「ま、待ちなさい。その子だけは連れていかせない！..」

『ふふ、この子を子供のように思つてゐるのね。』

涙が出ちゃう。でも、所詮国から見たらただの兵器よ』

「わ、分かつてるわ。それでも！」

『うざい』

その手を足で蹴飛ばし出口へと向かつていった。

「待つて・・・」

そのまま意識を失つてしまつた。

『むむ！狭くて通れないわね。どうしよ』

ISをそのまま担いでいるため引っかかつて通れなかつた。

『面倒だし。天井を吹き飛ばすかな？

ダークネス・オーバーロード！..』

一夏の周りに炎が集約され一気に天井に放出された。

『ふ〜。行きしなもこうすれば良かつたわね。反省』

そのまま帰ろうとした瞬間・・・

「待ちやがれ！」

『あ、ひ？』

もつ一機のIRSが現れた。

「そいつを返しても、おひつか？」

『嫌よ、この子は私の物よ！』

「ガキ、今返したら怒らねえから返す

『絶対に嫌だ！おばさん！』

「お、おばさんだと？このがきやー」

そのまま直線に突っ込んだ。

『ふふふ』

しかしそれを避けようとせずにただ突っ立っていた。

「うらあああああ！」

逆手に持つたナイフが言葉の通り貫いた。

「な、なんだこれ！？」

貫いた瞬間、炎となりおぼさんを燃えし始めた。

「くそ！何だつてんだよ！エネルギーが減つてんじゃねえか！」

『あんまり怒るとしわ増えるわよ？お・ば・さ・ん』

「何なんださつきのは！？」

『お礼に教えてあげる。さつきのはは蜃気楼よ。ま、怒つてたから

バレなかつたんだけどね』

『待ちやがれ！』

IRSが解除された。

「くそ！何でだ！？」

『じやあね～』

『くそがあああああーーー』

第十七話　一夏の初任務（後書き）

こんばんわ～ケンです。

遂に任務が行われ福音が奪われました！

ここから一夏の復讐劇が本格的に始動です！

ちなみに仮面はマンガから取りました。

では、さよなら～

第十八話 家族のよつな光景

（アメリカ某所）

ある会議室で合衆国のトップたちが密談をしており怒号が鳴り響いていた。

「どういう意味だ！」

「申し訳ありません！」

「我が国のＩＳが奪われたのはこれまで一機目だぞ！それを分かつてているのか！？」

「分かつてあります！」

「ならば何故、代表とテストパイロットがいながら死守すら出来んのだ！」

「申し訳ありません！現在、軍の総力をあげて奴の情報を集めております。必ず捕まえてみせます！」

「そんな事は誰でも言えるのだ！それでも我が国のパイロットか！？」

「申し訳ありませんでした！」

「もう良い！出ていけ！奴を捕まえるまで私の前に顔を見せるな！」

そのまま一人の女性は部屋から出て行つた。

「それで情報は集まつてゐるのか！」

いかにもお偉いさんというオーラを出してゐる人物が傍にいた側近に怒鳴つた。

「残念ながら一切出てきておりません」

「くそ！これでは他国のいい笑いものだ。

この事は絶対に外に流すな！いいな！？」

「は！」

「くそが！あの豚野郎が！こっちの身にもなれつてんだ」

「落ち着きなさい。イーリ

「お前はそれで良いのか！？ナタル！」

「私だつて気分は最悪よ。でもそんな事をしてるよりも一刻も早くあいつを見つけるわよ。おじいのほそいつに怒りなさい」

「ちつ！分かつたよ」

二人は自らの持ち場へと戻つていつた。

少し時間を遡りアメリカ上空へ

「お前、それ・」

『どう？凄いでしょ？奪つてきちゃつた。私天才かも！』
エムは目の前の状況に頭の整理がついていけなかつた。
なんせ一人で軍に特攻していき
ほぼ無傷で国家代表を圧倒し

あまつさえEISまでも奪つてきた事に驚いていた。

『さ、帰りましょ？エム。私お腹減つちゃつた』

「おい」

『何？』

「私はお前がこの任務で失敗すれば殺すつもりだつた
だが、貴様は成功させた」

『そうね。で？どうするの？』

「認めてやる。貴様をこちら側の人間だとな」

『ふふふ、それはありがたいわね。大先輩に
認められたらこの先安泰だわ』

「それよりこれからどう呼べばいい？」

『あ～そうだつたわね～うん・・・・・・

決まつたわ！ゼロ。うん、ゼロが良いわ』

『分かつた。これから頼むぞゼロ』

『ええ。それよりも帰りましょ？』

IS学園へ

「あれ？一夏は？」

今は夕方だがいつもなら一夏が部屋でグータラしているのだが
部屋にもいないので探しているというわけである。
ちなみに簪は一夏を少しでも良いから前に戻つて
もりうべく特訓に誘おうとしているのである。

「え？ 外泊庵！？」

「はい、そうですよ。確かに2時間ぐらい前くらいに

急いだ様子でこれを出していきましたよ？」

「はあ、そうですか。ありがとうございます」

「おかしい。確かに前も出してたよね？
何で連續で出したんだろ。今度聞いてみよ」

「あらお帰りなさい。二人とも。成功したみたいね」

『まあね』

「ゼロ、そろそろ止めたらどうだ？

本当にキモイぞ」

そう言われ一夏は仮面をなおした。

「ふ～そつ言うなよ。じつしないとばれる」

「そう言えばゼロって？」

スコールが不思議に思い質問した。

「こいつの名前だ」

「そう、良じじやない。でもここでは良いわ。
任務中はそう呼ぶわ」

「そうするかな。その前に腹減った。何かないか？」

「ふふ、そうね。そろそろ夕御飯の時間だし
何か食べましょうか。オータムもエムもね」

「「ああ」

＜とある構成員の証言＞

連れ添いながら入つていく様子はまるで本物の家族のように見えま

し
た。

第十八話　家族のような光景（後書き）

こんばんわ～ 模試が終わって修正していると
こんな時間になつたケンです。

如何でしたか？

感想やレビューも待つてま～す。

それではさよなら～

第十九話 気持ち

翌日

一泊向こうで泊まった後、学園に帰ると簪に絡まれた。

「あ！こんな所にいた」

「簪・・・」

「一夏、ちょっとついて来てくれる？..」

「めんどうなことじやなかつたらいいけど」

「うん、めんどうな事じやないよ」

「・・・・やつぱ、行かない」

「そういわざに行くよ」

「お、おいー引っ張るなー服が伸びるー」

そのまま簪に手を引かれ連れてこられたのはアリーナだった。

「何でこんな所に」

「さ、特訓しよ？」

「・・・・帰る」

そう言い帰ろうとする一夏の足元の地面が突然、炸裂した。

「うお！何すんだよ！殺す気か！？」

「さ、一緒にしよ。ね？」

その笑顔は文句は言わせないぞというオーラを漂わせたものだったという。

「分かったよ。はいはい、やりましょつか」

「うん！」

こうして一人の特訓が始まった。

とは言つてもただ単に模擬戦をするだけであるが。

「いやー簪は強いなー」

結果は簪の圧勝だった。

「・・・・・」

「流石わ代表候補生だな。俺みたいな奴が適う訳がねえよな」

「ねえ、一夏」

「ん? 何だ?」

「さつきの模擬戦、本氣だつた?」

「ああ、本氣だつたぞ」

「じゃあ、どうしてあの時ブレードで切れる時に切らなかつたの?」

「それはお前から見たらだ。俺から見れば・・・」

「嘘つき!」

「! ! ! ! !」

突然、簪が声を荒げた。

「一夏は剣が得意だつたよね? さつきのは素人の目から見ても切る所だった。それなのに一夏は切れなかつたつて言った! 違うよ! 一夏は切れなかつたんじやなくて切らなかつたんじやないの?」

「ねえ、答えてよ!」

「・・・・・帰るわ」

「一夏!」

「もう俺を誘うな。お前まで気分が悪くなる」

「ねえ! 言つてよ! 一夏!」

「・・・・・」

「ねえ! 聞いて」

「つめるさい!」

「! ! ! ! !」

「さつきからお前は俺の何なんだ! お前に何が分かるんだ! ?」

「い、いち

「俺の事なんかほつとけよ! お前に関係ないだろ!」

「「」「」めさん

「ちつちつ！」

そのまま一夏は去ってしまった。

一夏の部屋へ

「くそ！…！」

一夏はイライラしながらベッドに横たわった。

『珍しいわね。貴方が感情的になるなんて』

「ファンタムか。どういう意味だ？」

『だつてそうでしょ？貴方は彼女たちに誘われても頑なに拒否して諦めさせるのに、今回は特訓に応じた所か貴方は彼女に怒った。

ほかのメンバーとは明らかに怒り方が違つてた。まるで、あなたの本心を見てもらいたいのか様に』

「…・・・俺でも分からない。

ほかの奴らに言わるとどうでもよく感じるので簪に言わると無性に腹が立つ。

それに今は後悔もしている『

『ふふふ、人間は面白いわね』

「そつかよ・・・・寝る』

『はいはい、御休み』

こうして一夏は意識を落とした。
簪の事を頭に浮かべながら。

第十九話 気持ち（後書き）

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
感想も待っています。
それでは～

第一十話 ものの気持ちは何か？

翌日

「よ、よつ簪」

「……」

そのままスルーして行ってしまった。

「お、怒つてゐるのか？」

『当たり前でしきうが』

「ファンタム……」

『あれで怒つてないなんて思う奴はよつぱびの馬鹿か
わざとしてるにしか思えない、と人間は考えるんじやないかしら』
『あ～もう一どうすれば、良いんだ～』
これは青春を送つてゐるある少年の物語。

「ひとまず簪に謝るか？」

一夏は休み時間にボケーっと考えていた。

「でも、俺の事がばれてもダメだしな～」

『だつたらばれない様に謝ればいいんじやない？

つて人間は言うわよ』

『そのバレない方法が知りたいんだけどな～』

「は～」

一夏の悩みは続いて行く。

そして昼休み

『よし～なら昼を誘つてそこで謝りつづけ～』

そう考へていると田の前に簪が見えてきた。

『よし～』

「か、簪」

「……」

見向きもせずに行ってしまった。

「そ、その何だ？ 昼飯でも一緒にどうだ？」

「・・・・・」

またまた無視。

「え、えつと、簪さん」

「・・・・・戦いで手加減しているような人と話さない

「だからあれは俺の本気だつて！」

「嘘。私から見たら手加減されている風にしか見えなかつた」

「だから、ほら、あれだよ。スポーツで経験者と素人が試合するようなもんだよ。経験者から見たら本気出してんのか？ みたいな感覚だつて！」

「・・・・・」

そのまま早足で帰つて行つてしまつた。

「な、何でだよ」

『は～』

ファンタムが盛大な溜息をついた。

簪 SIDE

簪はお昼を食べながら考えていた。

「あれから撮つておいた映像を何度も見たけど絶対に一夏は手を抜いていた。

なのになんで皆はそれに気付かないの？」

実はあの後、簪は一応一夏の言つている事も考慮に入れて皆にその映像を見てもらつた。

勿論、先生方にもだ。

しかし、皆、口をそろえていつたのが

「いつもの一夏じゃないか」

皆にはそういう風に見えていたのだ。

皆は同じクラスだから一夏の変化に気付かないのかもしれない。

「絶対に一夏は手を抜いていた。今の一夏より

前の一夏の方が強かつたのに今ではその面影も見えない」
だから簪は決心した。

「一夏が認めるまで絶対に話さない」

それから簪の決心は強かつた。

どれだけ一夏に喋りかけられても無視、もしくは冷たくあしらつ。
しかし一夏も一夏だつた。
どれだけ無視されても喋りかける。
まるで恋をした少年のように。

「あ～今日も簪に無視られた」

あれから5日くらい無視されているのである。

『ねえ、一ついかしら?』

「何だ?」

『どうして貴方はそこまで彼女に拘るの?』

「それは・・・・・」

『だつてそうでしょ?他のメンバーは気にしないのに
あの子に無視されると必死に喋りかける。
矛盾してない?』

「・・・・・」

『ま、所詮私は機械。人間の感情は分からぬ。寝るわね、御休み』

そう言いファントムは機能を一時停止した。

「・・・・・寝よ」

一夏も眠りへと入った。

翌日

今日も一夏は喋りかけていた。

しかし、今回は雰囲気が違つた。

「簪。話があるんだ。部屋まで来てくれ

「・・・何故？」

「IJの前の事についてだ」

「・・・分かつた」

そのままその日は放課後まで喋らなかつた。

放課後

「一夏？入つても良い？」

「ああ、どうぞ」

「お邪魔します」

時間は20時ジャストだつた。

「悪いなこんな時間に」

「うんうん」

「それでだ。IJの前のことなんだが

「・・・」

「本当にあれが今の俺の実力なんだ」

「嘘」

「嘘じやない。俺はただ単に白式がハイスペックなだけだつたんだ

「違う。あれは間違いなく一夏の実力だよ」

「違う。お前が手をぬいているつて感じたのもそれだ。
訓練機になつたとたんに俺は弱くなつた。

つまり白式のお陰だつたんだよ」

「何で？何でそこまで一夏は自分を下に見るの？
そりや、一夏はIJの図面だつて読めないし
整備だつて出来ないよ？でも、それはただ単に
詳しく勉強していないからだよ」

「いいや、簪だつて分かつてるだろ？」

放課後遅くまで残つて簪にIJの事を教えてもらつても

結果はあれだ。過程は関係ない」「違うよ！」

「…………」

「あれはただ単に私の教え方が下手なだけだつたの！一夏は・・・」

「もう良いよ。その気持ちだけでも嬉しいよ」

「一夏・・・・・」

「だからさ簪。明日から」

「嫌、嫌！言わないで！」

「簪？」

簪が突然泣き出した。

「一夏は私も離すの？そんなの嫌だよ！私は一夏の傍にいたい！」

「な、何を勘違いしてんだ？」

「え？」

「俺は明日から放課後にI-Sの事教えてくれないかなって言おうとしたんだが」「え？ そうなの？」

「うん」

簪は突然、顔を赤くした。

「は、早く言つてよ！恥ずかしい！」

「あ～顔を真っ赤にしてる簪も可愛いな～」

「え、えつと、そのじゃあ明日から特訓するんだよね？」

「ああ、頼んでも良いか？」

「うん！勿論だよ！」

簪の笑顔を見て一夏の心臓は高鳴った。

簪に聞こえるんじやないかというほどに。

「な、何だこれ？何で簪の笑顔を見ただけでこんなにドキドキしてんだよ。」

そ、そりや簪は可愛いとは思つてゐけど

そ、そんな目で見ている訳では

「ん？ 一夏、顔赤いよ？」

簪が一夏の顔を見ようと顔を近づけた。

「な、何もない…じゃ、じゃあそつ言つ事でお、御休み！」

「う、うん御休み」

半ば強引に部屋から追い出した。

「やばかった。あれは本当にやばかった。一瞬、

理性が崩れかけたぞ」

『貴方、結構ひどいのね』

「気付いてたのか」

『ええ。どうせ貴方は怪しまれないように彼女との特訓を始めた。そうすれば気付かれる可能性も少なくなつたつてことでしょう』

「まあな、これもあいつらをぶつ潰す

為の布石だ」

その頃、簪は…

「やつた！ 一夏と特訓。そ、それに一人つきり。

う、か、軽くお化粧とかしようかな？

い、いやただの特訓だし、そんな事をしたらダメだよ！

うん！ 駄目！

顔を緩めながらスキップで部屋まで帰つていった。

一夏の真意にも気づかずには。

第一十話 わの気持ちは何か？（後書き）

Good morning.

ケンです。

如何でしたでしょうか？

最近、ほかのメンバーが出せない（泣）
一夏はじきにその想いに気付きます。
では、行つてきま～す。

第一十一話 かくして少年、いや少女は動き出す

十一月にも入り少し肌寒くなつた今日この頃。

IS学園の制服も冬服になつた日の事。

「は？専用機持ちだけのトーナメント？」

「うん」

一夏が簪との特訓も終わり一人で休憩している時の事だつた。

「何なんだそれ？」

「お姉ちゃんによると最近、いろんな事があつたから

休憩がてらにつてことでやるんだつて」

「前にもそんな事でやつてたよくな」

「あつそ。別に俺には関係ないけど」

「そ、そただけど、応援くらいには来てくれる？」

涙目で上田づかいをされた。

「うう。そ、そんな目で見るなよ」

「ねえ、聞いてる？」

「わ、分かつたよ。行くから」

「ほんと？ほんとだよね？」

「ほ、ほんとだから」

「やつた！ありがと！私頑張るからね」

一夏は満面の笑みを喰らい心臓が高鳴つた。

「ま、まだ。また心臓が鳴りまくつてる」

一夏は顔を赤くして目を背けた。

「あ、ああ頑張れよ」

「うん！じゃあ、特訓再開しようか

「ああ」

そして特訓が再び始まつた。

特訓も終わり部屋に戻つた一夏は

スコールに電話をしていた。

「俺だ」

『あら、どうしたの一夏君?』

「再来週から専用機持ちだけのトーナメントが行われるらしい」

『へ～面白いわね。そうね～』

「俺に考えがあるんだが良いか?」

『別に良いけど、どうする気なの?』

「俺の存在を知らせようと」

『そうね～どの道知られるのも時間の問題ねいいわ。好きにしていいわよ。

その代わりやり過ぎには気をつけてね?』

「ああ、分かった」

一夏の顔は笑っていた。

だが、普通に笑う顔ではなく邪悪に染まつた笑顔だった。

「はは～! これで、よつやくあいつらを捻りつぶせる。

首を長くして待つてろよ。馬鹿ども」

その口はそのまま眠りについた。

そして日が経ち翌日となつた。

「ふああ～寝み。当田か。は～めんど」

一夏は顔を洗い、服を着替えた。

「せ～てど、まずは簪の応援か。は～」

ひとまず一夏は朝食を取りアリーナへと向かった。

「やあ、皆おはよ～。元気かしら?」

「「「「会長～～～」」」

「あらあら、皆、元気すぎるくらいね

会長による開会式が始まった。

「今日は息抜きの感覚で見てもらつたら結構だけど
皆、強いから奪えるところは奪つて自分の物にしてね」
「ははー！お前のその上から目線も相変わらず
うざいな。ひねりつぶしたい」

「で、毎回田列の導丁を

卷之三

まなかよ

「今日は前に

それで予想が当たつた人には

なんと！学食デザート半年分あげちゃうわよーーー

「…………」

卷之三

黒鹿か

「ことで始めるわよ~」

「「「いええええええ！」」

今、一夏の目の前では代表候補生との戦闘が行われていた。

すると突然、一夏の雑誌が

一國の主導的立場

もしもし、俺だ

「ああ、私だが

「エムか、出来たか？」

『文部省圖書監修官』

ああ 準備は整つたぞ お前のところへおこ

学園の電子回路は全てお前のいるアリー・ナだけ
破壊しておいた。まだ、気づかれてはいいない。

やるなり今だぞ。ゼロ

「ああ、ありがとうございます。今度何か奢つてやる」

『ふん、楽しみにしてるぞ』

「ああ

卷之三

それを最後に電話は切られた

卷之三

いや私の強さを奴らに見せつけられる。
待ってる。肩とも

第一十一話 かくして少年、いや少女は動き出す（後書き）

こんばんわ～です。

如何でしたか？

次回でゼロの正体が学園に知られます。

それでは～

第一十一話 ゼロの力（前書き）

今回は少し長めです。

第一十一話 ゼロの力

現在アリーナでは箒と樋無による対戦が行われていた。

「なかなかやるよになつたじやない。箒ちゃん！」

樋無は剣をさばきながら嬉しそうに言つた。

「日々の貴方の訓練のお陰ですよー！」

箒も自信があつたのか

嬉しそうに答えた。

「絢爛舞踏も自由に使えるみたいだしね！」

「そりやどうも！」

いつたん二人は距離を取つた。

「お姉さんは感激だわ」

「ははは、そうですね」

「そろそろ終わりに・・・・・何これ？」

「これは？」

樋無と箒のいるアリーナ一帯に黒い羽が舞つていた。

「黒い羽？カラスかしら？」

「カラスだけでこんなに舞いませんよ。樋無さん」

するとオープニングチャンネルから千冬の声が聞こえてきた。

『どうした二人とも？』

「あ、織斑先生。実は黒い羽が舞つてるんです」

『黒い羽だと？こちらからは何も見えないが』

「そんな事は」

すると突然、観客席から声が上がつた。

「何あれ！」

「？？？」

二人は上を見上げるとそこにあつたのは・・・

「黒い炎？」

そこには黒い炎に包まれた何かが徐々に降りてきていた。

その姿はまるで悪魔に翼が生えたような格好だった。

その頃、

「山田君、念のため警戒レベルを引き上げてくれ」

「分かりました」

山田先生がその動作をしようと入力するが
警報は鳴らなかつた。

「あ、あれ？」

「どうした、何をしている？」

「わ、分かりません。こちらの指令を一切寄せ付けません！」

「何だと！？」

それから何度も指令を伝えようとすると一切寄せ付けなかつた
「くそー、どうなつているー！」

そりやそうである。元の電源が切れていれば
何度も一切反応しないはずである。

『・・・・』

「貴方は何者なの！？ いつたい何の理由で
ここに侵入したの！？」

『ふふふ、まあそんなに怒りなさんな。
折角のきれいな顔が皺だらけになつちゃうわよ。』

「そんな事より貴様は誰だ！？」

『はーせつかちねー、ま、いいわ。

ねえ、私も混ぜてくれない？

なかなか楽しそうな事してるとじやない、貴方達

『ふざけるなー！』

『纂ちゃん！』

纂が一本の刀で攻撃してきたがゼロは
片手で一本とも受け止めてしまつた。

「な！」

『え～こんなもの？こんな奴に最強の
ISを渡すなんて篠之ノ博士も田がないわね～』

「何！？」

『雑魚には興味無いの。消えて？』

ゼロは筈にボディブローを入れると

筈は腹を抱えてしゃがみこんでしまった。

「筈ちゃん！」

「ぐ・・う」

『え～結構手加減したのに～』

「筈ちゃんから離れなさい！」

楯無が攻撃してきたがそれを

難なくゼロはかわして一旦距離を取った。

『あら、貴方羨ましいわね。その巨乳。私なんかまな板なのに。
どうやつたら大きくなるか教えてくれない？』

『何なのあの子？調子が狂う』

『ま、いいわ。そろそろ着たようだし・ね！』

ゼロが高速で避けるとゼロが

いた場所が突然、爆発した。

「そっち行つたわよ！」

ゼロの頭上から青色の光が何本も降りてきいていた。

『ふ～ん』

ゼロは避けようともせずただただ立っていた。

『喰らいなさい！』

着弾した瞬間に大量の弾丸とミサイルが降つてきた。

『やつたね！』

『まだ気は抜くなよ？』

そこには鈴、シャルロット、ラウラそして簪がいた。

『みんな！どうして！？』

楯無が驚いたように聞いた。

「織斑先生が緊急事態が発生したからすぐに来いって言われて」

「大丈夫か！？ 築！」

「ああ、すまないラウラ」

「ひとまず、侵入者って聞いたけど呆気なかつたわね」

『それはこっちの台詞よ』

「「「！」」「」」

「そ、そんな！？ あれだけの攻撃を喰らつていながら無傷だなんて」

『避けるのめんどくさかつたから』

『避けないであげのに、こんなに弱いなんてね』

「あんたは何者なのよ！？」

鈴が声を荒げて言った。

『そんな事はどうでもいいわ。かかってきなさい。全員でね』

「貴様、正氣か？」

『ええ、正氣よラウラちゃん。』

貴方達ごときでは私に攻撃何か『えれれない』

『言つじやない！ 上等よ！』

鈴がゼロに突撃していった。

「待て鈴！ くそ！」

全専用機持ち対ゼロの戦いが始まった。

「喰らえ！」

鈴が龍砲を放つがそれを一夏は見向きもせずに全て避けた。

「そ、そんな！」

「今度はぼくが行く！」

シャルロットがマシンガンをホールしづロに向けて撃ち始めた。

『は～遅

それをゼロはいとも簡単に全て避けた。

「ラウラ！」

「任せろ！」

ラウラがエネルギー手刀で接近戦に来た。

貴様はいつまで丸腰のままでいる!?

『ん~いつまでかしらね~』

「なめるな！」

卷之三

このように戦いか数分間続けられた。

『ん、そろそろかしこ』

「...かしきへまい」

ええ、こめんなさしね？ 金庫せん

『細の井』の二冊二編の試験

ゼロが名前を呼ぶとともに武装が現れた。

あれは？」

く見て過げないと当たるね」と

教えるべきか、お門へ一咄のハナシでござ

発射されていつた。

「な、何なのよこれは！？」

「そんな事はどうでも良い！避けろー！」

金員 避けるか? サイ川が追いかけてきた。

な！ 週雇性能まで

「#」を付けてお読み下さい

「ヤシリニアちゃん！」

セシリヤに一発のミサイルが着弾した瞬間

脅大な量のミサイルがそれに続き着弾していく

『うれしいが、おれの仕事は、おれの仕事だ』

エネルギーが根こそぎ奪われISが解除されて

『はつは～！！一匹出来上がりよ～！』

「く！セシリア！」

「行くな！簫！」

セシリアを助けに行こうとした簫をラウラが止めた。

「何故だ！」

「今、貴様まで行けばやられるぞ！」

「くそ！」

全員がミサイルを避けるので精一杯だった。

『さてと次はあいつに決定！』

ゼロが標的にした人物、それは・・・

「鈴！後ろだ！」

「え？」

『ライダー キーック！』

蹴りを入れられた鈴がアリーナの壁にぶつかり壁にひびが入った。

「がはつ！」

鈴は血を吐きEDが解除された。

「鈴――――！」

『二人目出来上がり～』

「よくも鈴を――――――！」

『よせ！シャルロット――――――！』

『使い捨て武器その一、電気ビリビリ鞭』

ゼロは鞭を手にコールし撓らせた。

「ああああああああ――！」

激昂し周りの見えていないシャルロットはそのままシールドピアースを片手に突っ込んでいった。

「シャルロット――！」

ラウラの声も聞こえないほどに。

「喰らえ――！」

最大速度の瞬時加速で

近づき撃ちこもったシールドピアースを

ゼロは避けて鞭をシャルロットに巻きつかせた。

「きや！ 何これ！？」

『ふふふ！電氣ビリビリ開始！』

靴を伝わり、高压電流が沙川口付近に流れれた

シリロ、

『これよね、IDSの絶対防護を貫ぐぐらーいの
シャルロットは氣を失いIDSが解除されてしまつた。

強力な電流を流してゐる。いくら絶対防護が

アーティストとして完全にがんばる基準

卷之三

親友を傷つけられ激昂したラウラが、エネルギー手刀を片手に突っ込んできた。

「戻りなさい！ラウラちゃん！！」

ああああああ！！死ねええええええ！！！

ゼロは片手に長めの刃をコールした。

セ日はラウラの渾身の一撃をかわし
ラウラを一閃した。

その刀にはラウラの血が付いていた。

— テウテー！

『そ、そんな。絶対防御すら切る刀なんて聞いたことがない』

「うへ」

『ねえ、それより彼はどうなの?』

「無」の世界

『青髪は？』

「い、一夏の事?」

「「！！」」

『ふうん。そこの一人群中ではその程度の存在か』

『いや違つて』

『よく言つわね?青髪の子に言われるまで気付かなかつたくせにっ』

「そ、それは・・・」

篠と樋無は何も言えなかつた。

「そ、それで一夏に何の用なの?」

『いや、彼も専用機持ちだつたでしょ?戦つてみたになんて思つてね。で?どこの?』

「もう一夏は専用機持ちじやないの」

『・・・そう残念。戦いたかつたのに。帰るわ』

「・・・・・・な」

「篠?」

簪が怯えたように聞いた。

「・・・るな、ふざけるな!」

「「！！」」

「貴様はこれだけの事をしておいて

帰るだと!/?ふざけるな!-

貴様は私が倒す!』

『無理よ、貴方達みたいな彼を忘れるような人には私には勝てないわ』

『ふざけるな!————!————!』

「篠ちゃん!もう!」

『冥土の土産に見せてあげるわ?』

『ワンドオフアビリティー』

『私達の单一仕様能力』

それを最後に一人は黒い炎に飲み込まれた。

「お、お姉ちゃん、篠、皆

簪の田の前には倒れた皆の姿が田に映つてた。
所々黒い炎が揺らめいているのが見える。

『ふふふ、後は』

徐々にゼロが一歩一歩に向かつてた。

「ひつ！」

簪は恐怖に体を震わせその場から動けないでいた。

『ん？』

「か、簪ちゃんには近づけさせなーーー。」

『へーこれが姉妹愛つてやつかーーー。『ひがー』』

「うぐー！」

ゼロは楯無の頭に足を乗せ地面に叩きつけた。

『わっしきから簪ちゃん、簪ちゃんつて「うわーいのよ』

楯無をほって近づいて行つた。

「あ・・・あ」

『あひやー震えちやつて可愛いじやない？

家に持つて帰つて愛でたいわね』

「ひつー！」

簪は頭を撫でようとするゼロの手を振り払い
どうにかして武装をだし攻撃しようとするが

それは既に炎によつて使い物にならなくなつてた。

『そ、そんな・・・』

『あひやー泣こちやつて。わっしきから見てたけど
貴方には戦いには向かないわ』

そのままゼロは踵を返した。

「ど、どこに行くの？」

『帰るの。もう用は済んだしね。また会いましょ？簪ちゃん』

そのまま翼を展開し去つていつた。

その様子を簪はただただ見ることしかできなかつた。

第一十一話 ゼロの力（後書き）

おはようございます。ケンです。

如何でしたか？

今回はヒロインボコボコの回でした。

感想も待っています。

それでは

第一十三話 After the accident

IS学園の人通りが少ない一角で仮面をつけた人物がいた。

『ふう疲れた。ファンタム、周りに人は?』

『いや、いないな。どうやら自室での待機命令が
出ているようね。人つ子一人いないわ』

『分かつた』

仮面を戻すと一夏の顔が見えた。

『どうだつた? ボコボコにした感想は?』

「はは! 最高だ! 今まで生きてきたなかで
ここまで幸福感を覚えたのは初めてだ!」

一夏の顔はまるで子供が欲しいものを手に入れた
それと一緒にだつた。

「でもまだ足りない! もつとだ! もつとあいつらの
絶望した顔が見てみたい!」

『ふふふ、それでこそ貴方だわ。あ、帰りましょ?』

「ああ」

自室へと向かつていった。

その頃学園は事後処理に追われていた。
負傷者の手当て、一般生徒への情報の
流出を防ぐなどで追いまわされていた。

「ガーゼ持つて来て頂戴! 大至急!」

「あ~もう! 休暇だつたのに!」

医務室では大勢の医者が走り回つていた。
その中で簪は隅の方でベッドにいた。

怪我は無かつたが念のためという事で

検査入院扱いだつたが

ほかのメンバーはそう言つ訳にはいかなかつた。

打撲に内臓損傷、そして一番の重傷がラウラであつた。

急所は外れていたが傷が深く未だに

手術室から出てきていなかつた。

「何にも出来なかつた。皆 戦つたのに私だけ

怖くて何もできなかつた」

未だに簪はある時の事を思い出すと体が震える。

「一夏、怖いよ」

簪は思い人の顔を浮かべ少しでも和らげようとしていた。

その頃一夏は

『まつたくやりすぎよ?』

「あれでも大分手加減はした。本気で行けば

全員、当分は病院送りだぞ」

『まあ、それもそうね。御蔭で

こつちは学園の情報もいくつか手に入れられたし』

「へえ、面白そうだな。スコール、聞かせてくれよ」

『その話は今度こつちに来たら言つわ』

「分かつた。じゃあな

『ええ、御休み』

電話を切るとファンタムが話し始めた。

『一夏、そろそろ』

『ああそうだな。行くかファンタム』

一夏は服を軽く整えた後

部屋を出て医務室へと向かつた。

簪が未だに震えていると突然、ドアがノックされた。

「ど、どうぞ」

「よー簪、大丈夫か?」

辺りは真っ暗で皆、疲れてるのか
はたまた気を失ってるのか
起きている人は誰もいなかつた。

「一夏！」

「簪？」

突然簪に抱きつかれ一夏は顔を赤くしてしまつた。

「どうした？」

「一夏！」

よく見ると簪は震えていた。

「何かあつたのか？」

「・・・・ごめん。言えないけど少しいうせて」「ああ」

「落ち着いたか？」

「うん、ありがとう」

先程よりは体の震えは収まつていたが
未だに少し震えていた。

「そう言えば今日、何か侵入者が来たんだつたよな？」

「な、何で知ってるの！？」

「そのアリー・ナに俺もいたからな」

「そ、そなんだ」

「何があつたのか教えてくれないか？」

「・・・・誰にも言わない？」

簪が涙目で上目づかいをしてきたので一夏は思わず
顔を赤くして目を背けてしまつた。

「一夏？」

「い、いや何でもない」

「そう・・・なら言つよ？」

「ああ、頼む」

簪は今日あつた事を全て包み隠さず話した。

自分の目の前で皆がやられていつた事、自分は怖くて何もできなかつたを話した。

「そうか」

話し終えた簪はまた震えていた。

「やっぱり私は無理なのかな？」

皆みたいに強くなれないの？」

「簪・・・」

一夏は今にも泣きそうな簪をそつと抱き締めた。

「一夏・・・」

「そんな事ねえよ。まだお前は経験が無かつただけなんだ。皆は色々とああいう経験を積んでいたから戦えたんだ」

「ほんと?」

「ああ、お前は十分強いさ。だつて

お前シャルに今日、勝つただろ?」

自分を信じる。な?」

「うん!」

それから一夏は簪が寝付くまで傍にいた。

『まつたぐ、貴方は本当に使えるものは使つのね』

「ああしないと俺が疑われるからな」

『あの子はどうするの? 貴方の一言で

こっちに来れるんじゃないの?』

『来れるだろうな。でも、前にも言つたよう

あいつはこっちに来るべき人間じゃない』

『でも本当はこっちに来てほしいんでしょ?』

「・・・・・」

『図星ね。気づいてない訳じゃないんでしょ?』

貴方のその抱いている感情を』

「・・・・・さつき気付いたさ。』

俺は簪が好きだ。一人の女の子としてな

『なら

「それでもあいつは表側あつちの人間だ。

俺みたいに裏側ひっちには来てはいけない

『そう。貴方がそこまで言うならもう言わないわ。でも後悔はしないでね？後味悪いから

「ああ、そのつもりだ。あいつらを潰すためなら俺は何だってやってやる。

使えるものは使い、潰すものはすべて潰す

もう後戻りはできない。

最後に残るのは喜びか、悲しみか。

それはこの先に分かること。

こんばんわ、ケンです。

如何でしたか？

一夏は今回の話で自分の想いに気が付きましたが
果たしてそれは成立するのでしょうか？

それでは、さよなら～

一夏は今、簪と『パーティ』にいた。

「ねえ、一夏どう?」

「あ、ああ可愛い」

一夏は顔を赤くしながら言った。

「俺何でこんな所にいるんだつけ?」

思い出せ、思い出せ。あれは確か・・・

それは襲撃事件も一旦は終息し

ほかのメンバーも退院した頃の事。

一夏は部屋で休日タイムを満喫していた。

といつても今はとっくに夕方を過ぎているのだが・・・

「あ~土曜日は午前中までで良かつたぜ。

お陰で半日休み放題。翌日は一日休み。

最高だ――――――――――――――――――――――

『二ノート道まつしぐらね』

二ノートの考えをしていると

突然ドアがノックされた。

「勝手に入つてどうぞ~」

「お、お邪魔します」

入ってきたのは一夏の想い人でもある簪であった。

「よ、よう簪。どうかしたのか?」

「う、うん。あ、明日そ、そのい、一緒に出かけない?」

「あ、ああ、い、良いぞ」

「こう事で翌日待ち合わせをして
デパートに行つた。

しかし、女の子の買い物を甘く見ていた。

「次はあっちに行こう!一夏!」

「お、おう」

「つまはあつち！」

「お、おう」

「次はあつち！」

「次」

「次！」

「ぜえ、ぜえ、ぜえ」

「もう一夏つたら体力ないね」

「あ、あのな」荷物持ちながら階段何往復もして

それで息が荒れないお前の方がすげえよ」

「ちょ、ちょっと休憩しようぜ」

「ん、そうだね。少し休憩しようか」

「賛成だ」

それから一人で喫茶店を探して空いている店に入った。

そこは結構レトロな感じで現代っ子には分からぬような店だった。

「いらっしゃい。一名ですか？」

「はい」

「こちらへどうぞ」

案内されたのはカウンターだった。

「ご注文は？」

「俺はブラックで」

「私はミルクコーヒーで」

「分かりました」

それからそれぞれ注文したものが出来た。

「ねえ一夏」

「何だ？」

「このあと少し付き合ってくれるかな？」
簪の十八番の涙目で上田づかいを繰りだし
見つめてきた。

「あ、ああ」

一夏の心臓は簪に聞こえるんじゃない
かといつぐりいに鳴り響いていた。

それから代金を払いその店を出て
簪に連れられてある場所に連れてていかれた。

「じじは？」

「じじはねよく昔遊んだ公園」

「く~」

そこには子供たちが元気良く楽しそうに遊んでいた。

「じじにいると嫌な事も少しほは忘れられるんだ」

「・・・・・」

「それに勇氣も少し貰える」

「勇氣？ 何で？」

「昔ね、今より私は人見知りだったの。
公園でも一人で遊んで家でも一人。

偶にお姉ちゃんとかお母さんが遊んでくれたけど
それも無くなつた。でね、ある日じこに来ると、
その日は一人の男の子しかいなかつたんだ」

「ふん。それで？」

「でね、その子が帰ろうとした時にポケットから
鍵を落としたんだけど気付かずに行きかけてた。
それを見てた私は届けようかとも思つたんだけど
怖かつたから言えなかつた」

「・・・・・・

「でもね、急に公園から声が聞こえてきたの」

「どんなん？」

「その鍵は男の子にとつて大切なものだから
返してあげなさいって。

今、思えば何かの聞き間違いだったと思うけどね」

「それで、勇気を貰えると
「うん。今も貰ってるよ？」

「は？」

急に簪がこちらを向くと

夕焼けの所為かはたまた恥ずかしくて顔を赤くしてゐるのか分からなかつたが

トマトの様に真つ赤だつた。

「私ね、好きな人がいるんだ」

「！――！そ、そ、う、か」

「その人はね初めて会つた頃は熱血で殻に閉じこもつてた
私を出してくれてこの世界の広さを教えてくれて
どれだけ傷ついても立ち上がりつて皆を護るつて
言つてた。でも、今は休憩中みたいなんだ。
でも、私はその人が好き」

「へ、へ、へ、凄いなその人。簪が惚れるぐらいの
男なんだからさぞ強くてカッコいいんだろうな
「うん。でもその人はすごく鈍感で
頑張り屋さんなんだ」

「・・・・・」

「もう！これでも氣付かないの？」

「何がだ？」

「は、一回しか言わないよ――一夏！」

「お、おう！」

「大――――――好きだよ――――！」

「！――！――！」

思わず一夏は後ずさつた。

「・・・・・・・い、一日待つてくれ」

「うん、良いよ」

それからは何も話さず部屋の前で分かれた。

「一夏！大――――好きだよ！――――」
未だに一夏の頭の中でリピートされていた。
その時の簪の笑顔が離れなかつた。

「ファンタム、俺はどうすれば
『は』また悪い癖』

「何？」

『貴方は何かにぶち当たると自分で考えずに
他人に助けを請う。貴方の悪い癖よ？
指示待ち人間で言つのかしら。
ま、ひとまずはあなた自身で考えてみなさいな』
そのままファンタムは機能を一時停止した。
「俺自身で考える・・・・・」

こんばんわっす！

ケンです。

如何でしたか？

果たして一夏は簪の告白に
どの様な返事をするのか？
お楽しみに～

第一一十五話　ばれるまでは幸せ

一夏は自室で横になりながら考えていた。

「一夏！だ——い好きだよ！——」

未だに頭の中で簪のあの告白と笑顔がリピートされていた。

「俺はどう返事すれば良いんだ」

一夏は考えていた。

自分は簪が好きなのはもう気づいている。

しかし、これから事を考えると簪に

迷惑がかかる。

「俺の目的はあいつらをぶつ壊すこと。でも簪は違う」

一夏は葛藤していた。

簪の告白を受け入れれば幸せにはなるが

その分行動が制限され、ばれる確率も大幅に上がる。

しかし、一夏の中では

簪の告白を受け入れないという

選択肢は何故か思い浮かばなかった。

「でも俺はあいつらを壊さなければいけない。

一体どうすれば良いんだ？」

そのまま考えに考え抜き

一つの回答が見つかった。

それは・・・・・

翌日

一夏は珍しく早起きをして

簪を昨日の公園に呼びだしていた。

「おはよ、一夏」

「ああ、おはよ。悪いな

こんな朝早くに呼びだしたりして」

「ううん。別に良いよ。一夏の頬みだし」「そつぱつて簪は昨日とおなじ笑顔になった。

「あ、ああ。ありがとうな。

それで昨日の返事なんだが

いいか？」

「う、うん」

さつきまで笑顔だった簪の顔が
その言葉を聞くと途端に
不安そうな顔になつた。

「簪

「うん」

「お、俺も好きだ！」

一夏は顔を真っ赤にしながら大声で叫んだ。

「ほ、本当？」

「ああ！」

すると急に簪が一夏に抱きついてきた。

「嬉しい！一夏大好きだよ！」

「俺もだ！」

しかし一夏はもう一つ考えていた。

「簪……」めんな。俺はお前を利用させてもらひつ。
目的を達成する為に』

一夏は簪を利用する事にした。

己の目的を達成する為に。

「簪……」

「な・・むぐ！」

簪が上を向いた瞬間、一夏の顔がドアップで
目の前に映し出されていた。

「もう、ずるいよ一夏」

そのまま簪は一夏を身を任せ目をつむり
その初めてのキスを堪能していた。

「悪い。急だつたけど」

「いいよ。でも一夏」

「ん、何だ?」

「雰囲気が足りないかな?」

「はは! そうだな」

「だからもう一回して?」

簪は上目づかいで一夏に頼んだ。

「そんな田で見られたら断れないのを

知ってる癖によ」

「ああ、いいぜ」

そして一人はもう一度キスをした。

「ふふふ」

「どうかしたのか? 簪」

一人は手を繋ぎながら学園までの道のりを歩いていた。

「こんなに嬉しいのは

初めてだからつい顔が緩んじゃうの」「簪は嬉しそうに顔を緩めながら言った。

「そうか」

一夏も嬉しそうに笑いながら言った。

しかし一夏の顔は嬉しさ

半分悲しさ半分といつた顔だった。

「本当にこの選択で良かったのか? 確かに簪は嬉しそうに笑っているけど

俺の事が知られたらこいつは・・・

それでも俺はこいつの笑顔が見たい! 例えこいつに嫌われたとしても

俺はその時までこいつを幸せにする! 」

一夏は心の中で決意し簪の手を強く握った。

遂に繋がつた二人の想い。

しかし少年の本当の姿を少女を
知つたとき本当に少女は

今の気持ちのままいられるのだろうか？

第一十五話　ばれるまでは幸せ (後書き)

こんばんわ～ケンです。

いや～遅れてしまふません。本当は朝にしようかと思ってたんですが
寝坊してしまいます。

如何でしたか？

遂に繋がつた二人の想い。
しかし、それはほんの短い
幸せにすぎないのでしょうか？
それでは～

第一十六話 Mission start

結局あの後は就寝時間まで一緒にいた。

今までの面白かった話をしゃべったりこれからどこ行くとか
そして就寝時間になるとキスをして部屋まで送つていった。

部屋に帰ると電話が入つていた。

「もしもし」

『こんばんわ。寝てたかしら?』

「いや、寝ていながどうかしたのか?」

『ええ、まあね。貴方は後悔していらないのよね?』

「……! 何でそれを?」

『お姉さんには分かるのよ。ま、声を聞いているあたり
後悔はなさそうでいいけどね。それで本題に入るわよ』

「ああ、言ってくれ」

一夏の顔つきが真剣なものになつた。

『実は前に貴方が暴れた日にね、エムに頼んで学園の
情報をあさつっていたの。そしたら面白い物が見つかったわ
「面白いもの?」

『ええ、学園はコアを持っているわ。それも複数ね』

「……そう言う意味か」

『心当たりがあるみたいね』

「ああ、そいつは恐らく一学期にあつた最初のトーナメントの時の
襲撃してきた奴の「コア、それと十月ぐらいにあつた
タッグトーナメントの時のコアだろ?」

『そこまでは知らないけど、貴方に任務を「与えるわ
「内容は?」

『学園に隠されているコアを

全て強奪してきて頂戴。

決行はそつちに任せせるわ』

「分かった」

『健闘を祈るわ』

一夏が電話を切るとドアがノックされた。

「こんな時間に誰だ？」

「はい。どうぞ」

「お邪魔しまーす」

来客者は一夏の彼女の簪だった。

「どうかしたのか？忘れものか？」

「ううん。まだ、一緒にいたいなって。駄目？」

簪は上目づかいを使って一夏を見つめてきた。

「はは！良いよ。俺は大歓迎だぜ！」

「きや！」

一夏は簪を急に自分の膝に座らせ
後ろから抱きしめる形となつた。

「い、一夏？」

「ん？何だ？嫌か？」

「べ、別に嫌とは言つてない・・・」

「はは！よろしい」

「何かあつた？」一夏

「何でだ？」

「いやなんとなくそんな気がして」

「何にも無いよ

「そう・・・」

結局、そのまま一緒にいて一人して寝てしまい
寮長さんにばれかけたとか。

数日後

生徒も寝静まつた深夜0時、一夏は準備をしていた。

「さてと、やるかな？ファンтом」

『ええ、スコールから送られてきたデータにはコアは学園の地下特別区画にあるらしいわ。後、そこに入るバスもあるわよ』

「よし、なら行くか」

『ええ』

一夏は部屋を出るとファンタムの案内をもとに目的地へと向かって行つた。

『もうそろそろ仮面を出した方がいいわよ』

「ああ」

一夏が顔に手をやると炎が集まつていき仮面を形成した。

『さあ、行きましょ。ファンタム』

『ああ』

一夏は送られてきたバスを使い地価と特別区画へと入つていった。

『へへここが特別区画か〜』

そこには様々な国からの連絡や生徒たちの

個人情報、そして「コーレムもそこに保管されていた。

『じゃ、行こうかしら? ファントム』

『ええ』

監視室

「ん?」

「どうかしたの?」

監視室には一人の宿直がおり監視をしていた。

「いや、今誰か人影が見えたような

「まさか〜今、夜中よ? こんな時間に入ると思つ?」

「い、いやでも記録には入つた記録があるし」

「あら、本当だ。怪しいわね。」

あたしが一応確認に行ってみるわ

「一人で大丈夫？あそこ出るつて噂だよ？」

「大丈夫！あたし非科学的な事は信じないから？」

「そう言い行つてしまつた。

「大丈夫かな？」

「とは言つてみたものの結構怖いわね」「そこは真つ暗で等間隔にある電球だけが光を発していた。

すると後ろで何かが落ちたような音がした。

「ひ！・・・って何だ。黒い羽か」

あ〜ビッククリした。・・・・・・・・・・・・

よつやく気がついたが遅かつた。

『see you.』

後ろから黒い翼を出したゼロが教員の首筋に手刀を入れ意識を奪つた。

『ふふふ、良き眠りを』

ゼロは目的地へと再び足を進めた。

こんばんわ～ケンです。
如何でしたか？
それでは、さよなら～

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5542x/>

インフィニットストラatos 白の消失、黒の出現

2011年11月9日19時08分発行